

千葉県八千代市

境作遺跡
殿内遺跡

一大型店舗建設工事区域内埋蔵文化財発掘調査報告書一

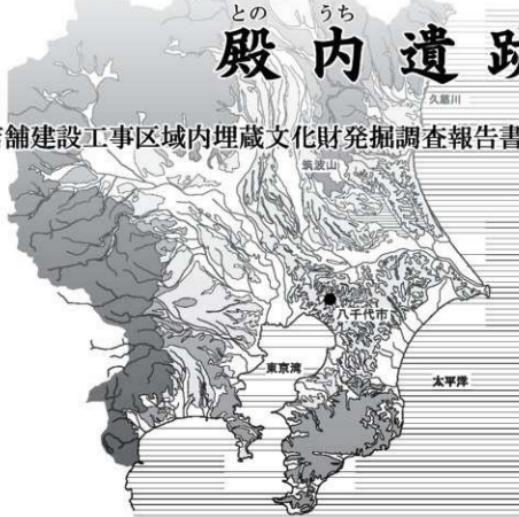
平成27年3月

イズミヤ株式会社
八千代市遺跡調査会

千葉県八千代市

さかい
境 作 遺 跡
との
殿 内 遺 跡
さく
うち

—大型店舗建設工事区域内埋蔵文化財発掘調査報告書—



平成27年3月

イズミヤ株式会社
八千代市遺跡調査会

例　　言

- 1 本書は、イズミヤ株式会社による大型店舗建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県八千代市村上字境作1230-1ほかに所在する境作遺跡（遺跡番号 八千代市No202）及び八千代市村上字境作1227-1ほかに所在する殿内遺跡（遺跡番号 八千代市No203）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務はイズミヤ株式会社の委託を受け、八千代市遺跡調査会が実施した。遺跡調査会の体制は以下のとおりである。

事務局会長	河野 繁雄（八千代市教育委員会 教育次長）
事務局長	篠田 一郎（八千代市教育委員会 社会教育課長）
事務係長	小笠原和也（八千代市教育委員会 社会教育課 文化係長 昭和60年10月30日まで） 菊島 一利（八千代市教育委員会 社会教育課 文化係長 同年11月1日から）
事務担当	木原 善和（八千代市教育委員会 社会教育課 文化係）
調査担当	秋山 利光（八千代市教育委員会 社会教育課 文化係）
確認調査	平岡 和夫（山武考古学研究所）
本調査	安藤 杜夫（山武考古学研究所）
基本整理	安藤 杜夫（山武考古学研究所）
整理・刊行	秋山 利光（八千代市教育委員会 教育総務課）
- 4 発掘調査及び整理作業は、下記の期間で実施した。

確認調査	昭和60年9月4日～昭和60年9月30日
境作遺跡本調査	昭和60年11月13日～昭和61年1月13日
殿内遺跡本調査	昭和61年1月6日～昭和61年1月13日
基本整理	昭和61年6月2日～昭和61年6月30日
整理作業	平成元年11月1日～平成24年3月31日まで断続的に実施
整理・刊行	平成26年1月14日～平成26年7月31日
- 5 整理作業において遺物整理・実測・トレス等は、大賀健・武部喜充（山武考古学研究所）の協力を得て安藤が行い、平岡和夫（山武考古学研究所）が総括した。また、遺物の整理では根本時子・富田弘子の協力も得た。今回、本書の刊行にあたって、再トレスを山下千代子が行い、遺物の写真、本文の執筆・編集を秋山が行った。
- 6 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 国土地理院 1/50,000 「佐倉」（平成10年発行）
第2図 八千代市 1/2,500 「八千代都市計画基本図」No.15,16,19,20（昭和53年測図、昭和60年修正）

第3図 参謀本部 陸地測量部 1/20,000「下志津原」(明治36年測図・明治43年発行)
をそれぞれ修正・加筆して使用している。

7 本書の遺構実測図における用例は、以下のとおりである。

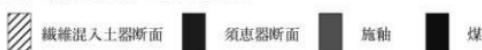
- (1) 遺構等の実測のための方眼測量は、現地で確認した磁北を基準にしている。そのため、本書で用いる図中の北方位は磁北を表す。また、遺構全測図は調査最終段階で、遺構全測図作成のための測量作業を開成測量株式会社が実施し、作成したものを用いている。
- (2) 遺構図面の縮尺は竪穴住居跡を1/60、土坑を1/60、カマドを1/30とした。
- (3) 図中の網掛けは以下のとおりとした。



- (4) 遺構名称は変更による混乱を避けるため、できるだけ調査時の名称をもちいることとした。しかし、基本整理時において、「15号住居址」とされていた遺構を殿内遺跡「1号住居址」と改められていたため、ここではそれを踏襲した。また、「住居址」は「住居跡」に文字を改め、使用した。
- (5) 遺構の略称については、当時の表記を踏襲し、「竪穴住居跡」を「H」とし、土坑を「P」とした。また、住居跡が重複する場合、調査時にはアルファベット大文字の「A」・「B」とされていたが、小文字の「a」・「b」で表記し、アルファベット大文字の連続を避けた。
- (6) 竪穴住居跡の規模及び中心軸について以下を基準とした。
住居跡の規模は、カマドを除外し、向き合う各壁の中点を結んだ壁間(中心線)を計測した。形状の表記は縦横の中心線の長さの差が10%程度を目安に「方形・長方形」の区分を適時判断した。
中心軸の方位については、カマドが付設されている壁の中心線、または、炉を通る中心線を中心軸とし、その方位を計測した。基準となる構造がない場合は、長軸方向ないしはその都度、適時判断し表現することとした。また、中心軸等の方位の表記は東西南北を基準とし、その基準方位から時計回りの角度で表わす「90°式」とした。中心軸に交差する中心線を横軸として表記した。
- (7) 竪穴住居跡の柱穴の配置は、柱穴の中心と中心を結び、向き合う辺の中心を結んだ距離を計測し、住居跡の表記にあわせて、中心軸方向(m)・横軸方向(m)として、規模、形状を表した。

8 本書の遺物実測図における用例は、以下のとおりである。

- (1) 図面の縮尺は基本的には以下のとおりとした。
完形土器実測図 1/3 土器拓影図・土製品実測図 1/3 石器・石製品実測図 1/3 鉄器 1/2
- (2) 図中の網掛けは以下のとおりとした。



- (3) 出土遺物出土地点を注記されていないものが多くみられたが、遺構外遺物に関しては、表採として扱うこととした。

9 表又は本文中の〔 〕は現存値、()は推定復元値を表している。

10 本遺跡の発掘調査に伴う出土品及び図面、写真等の記録類は八千代市教育委員会で保管する。

目 次

例 言・目 次・挿図目次・表目次・図版目次	
第Ⅰ章 遺跡と調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の位置と立地	3
第3節 周辺の遺跡	4
第4節 確認調査の概要	6
第5節 本調査の方法と経過	8
第Ⅱ章 境作遺跡	11
第1節 壘穴住居跡	12
1号住居跡	12
2号住居跡	14
3a号住居跡	16
3b号住居跡	18
4号住居跡	20
5号住居跡	24
6号住居跡	26
7号住居跡	27
8号住居跡	29
11号住居跡	34
12号住居跡	36
13号住居跡	38
14号住居跡	40
第2節 土坑	42
第3節 その他の出土遺物	42
第Ⅲ章 殿内遺跡	46
第1節 壘穴住居跡	47
第Ⅳ章 まとめ	48
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1図 境作遺跡と殿内遺跡の位置と周辺遺跡	
第2図 境作遺跡と殿内遺跡の立地と周辺の調査状況	2
第3図 境作遺跡と殿内遺跡の周辺地形	4
第5図 確認調査トレンチ配置	7
第7図 境作遺跡の検出遺構	11
第9図 1号住居跡カマド	13
第11図 2号住居跡	14
第13図 2号住居跡出土遺物	15
第15図 3a号住居跡カマド	17
第17図 3b号住居跡	19
第19図 3b号住居跡出土遺物	19
第21図 4号住居跡カマド	21
第23図 4号住居跡出土遺物(2)	23
第25図 5号住居跡カマド	24
第27図 6号住居跡	26
第29図 7号住居跡	27
第31図 7号住居跡出土遺物	28
第33図 8号住居跡カマド	30
第35図 8号住居跡出土遺物(1)	32
第37図 11号住居跡	35
第39図 12号住居跡	36
第41図 12号住居跡出土遺物	37
第43図 13号住居跡カマド	39
第45図 14号住居跡	40
第47図 14号住居跡出土遺物	41
第49図 1号土坑出土遺物	42
第51図 土製品	44
第53図 殿内遺跡の検出遺構	46
第55図 1号住居跡出土遺物	47
第57図 周辺遺跡の遺構検出状況	51
第4図 調査区の基本土層	6
第6図 本調査区域遺構検出状況	9
第8図 1号住居跡	12
第10図 1号住居跡出土遺物	13
第12図 2号住居跡カマド	14
第14図 3a号住居跡	16
第16図 3a号住居跡出土遺物	17
第18図 3b号住居跡カマド	19
第20図 4号住居跡	20
第22図 4号住居跡出土遺物(1)	22
第24図 5号住居跡	24
第26図 5号住居跡出土遺物	25
第28図 6号住居跡出土遺物	27
第30図 7号住居跡カマド	28
第32図 8号住居跡	30
第34図 8号住居跡土層・エレベーション	31
第36図 8号住居跡出土遺物(2)鉄器	33
第38図 11号住居跡出土遺物	35
第40図 12号住居跡カマド	37
第42図 13号住居跡	39
第44図 13号住居跡出土遺物	39
第46図 14号住居跡カマド	41
第48図 1号土坑	42
第50図 繩文土器	43
第52図 その他の遺物	45
第54図 1号住居跡	47
第56図 境作遺跡と殿内遺跡遺構検出状況	49

表 目 次

第1表 検出遺構一覧表	8	第2表 1号住居跡出土遺物観察表	13
第3表 2号住居跡出土遺物観察表	15	第4表 3a号住居跡出土遺物観察表	18
第5表 3b号住居跡出土遺物観察表	20	第6表 4号住居跡出土遺物観察表	23
第7表 5号住居跡出土遺物観察表	25	第8表 6号住居跡出土遺物観察表	27
第9表 7号住居跡出土遺物観察表	29	第10表 8号住居跡出土遺物観察表	33
第11表 11号住居跡出土遺物観察表	34	第12表 12号住居跡出土遺物観察表	38
第13表 13号住居跡出土遺物観察表	39	第14表 14号住居跡出土遺物観察表	41
第15図 1号土坑出土遺物観察表	42	第16表 M8グリッド貝ブロック	45
第17表 N7グリッド貝ブロック	45	第18表 その他のグリッド出土遺物観察表	45
第19表 墓内遺跡1号住居跡出土遺物観察表	47	第20表 古墳時代後期の住居跡の出土遺物	48
第21表 奈良時代住居跡の出土遺物及び中心軸等方位・規模	48		

図版目次

図版表紙 境作遺跡近景

図版1 1. 境作遺跡全景 2. 墓内遺跡全景 3~8. 確認調査トレンチ掘削状況

図版2 1~4. トレンチ内遺構検出状況 5~7. 境作遺跡完掘状況 8. 境作遺跡標準土層

図版3 境作遺跡 1号住居跡・出土遺物

図版4 2号住居跡・出土遺物 3a号住居跡

図版5 3a号住居跡・出土遺物 3b号住居跡・出土遺物

図版6 4号住居跡・出土遺物

図版7 5号住居跡・出土遺物 6号住居跡・出土遺物

図版8 7号住居跡・出土遺物 8号住居跡・出土遺物

図版9 8号住居跡出土遺物 11号住居跡・出土遺物

図版10 12号住居跡・出土遺物 13号住居跡・出土遺物

図版11 14号住居跡・出土遺物 1号土坑・出土遺物

図版12 その他の出土遺物 繩文土器

図版13 その他の出土遺物 土製品 貝ブロック検出状況と出土貝類

図版14 その他の出土遺物 その他の遺物 墓内遺跡 1号住居跡・出土遺物, 墓内遺跡近景



第1図 境作遺跡と殿内遺跡の位置と周辺遺跡

1. 境作遺跡・殿内遺跡 2. 指田遺跡 3. 正院院館跡 4. 村上宮内遺跡 5. 西山遺跡 6. 村上原遺跡 7. 大塚遺跡 8. 大塚南遺跡 9. 村上込の内遺跡 10. 名主山遺跡
 11. 野路作遺跡 12. 浅間内遺跡 13. 白糸道跡 14. 稲上神社古墳 15. 沖坂古墳 16. 神塚遺跡 17. 黒沢遺跡 18. 黒沢古墳 19. 黒沢池上遺跡 20. 新林遺跡
 21. 二重塚遺跡 22. 苔地ノ台遺跡 23. 桜垣後遺跡 24. ナサル山遺跡 25. 北海道遺跡 26. 白堀前遺跡 27. 池の遺跡 28. 川崎山遺跡 29. 藤野大作遺跡
 30. 新東京遺跡 31. 伸山古墳群 32. 内野第2遺跡 33. 島田込の内遺跡 34. 平戸遺跡 35. 上谷遺跡 36. 墓塚遺跡 37. 向境遺跡 38. 要谷遺跡 39. おおびた遺跡
 40. 南谷遺跡 41. 先崎遺跡 42. 下高野新山遺跡 43. 阿蘇中学校東側遺跡 44. 平沢遺跡 45. 穂ノ上遺跡 46. 逆水遺跡 47. 間見穴遺跡 48. 佐山台遺跡
 49. 真木野向山遺跡 50. 瓜ヶ作遺跡 51. 松原遺跡 52. 奈良遺跡 53. 勝新田遺跡 54. 本郷部遺跡 55. 奈納川遺跡群 56. 高津折山遺跡 57. 内込遺跡 58. 球場台遺跡
 59. 小板橋遺跡 60. 上ノ山遺跡 61. 小室台遺跡 62. 谷田木曾地遺跡 63. 北の台遺跡 64. 向新田遺跡 65. 鳴門山遺跡 66. 船尾白壁遺跡 67. 西根遺跡
 68. 船尾町田遺跡 69. 向ノ山遺跡 70. 船尾城 71. 松崎II遺跡 72. 松崎IV・V遺跡 73. 中内遺跡 74. 馬々台遺跡 75. 東川遺跡 76. 戸岩広谷遺跡 77. 西ノ台遺跡
 78. 神楽番遺跡 79. 上座矢橋遺跡

第Ⅰ章 遺跡と調査の概要

第1節 調査に至る経緯

昭和60年5月16日付で、イズミヤ株式会社(大阪市西成区花園南)から八千代市村上字境作1213-2他の区域、面積18,262m²において、大型店舗建設を目的とした「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会(以下「県教委」という。)宛に、八千代市教育委員会(以下「市教委」という。)に提出された。

当該照会地内には、2ヶ所の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在していた。照会を受けた市教委が現地踏査を行ったところ、古墳などの地上構築物は確認されなかつたものの、現況は山林や荒地となっていたが、両包蔵地において土師器などの遺物の散布を確認することができた。

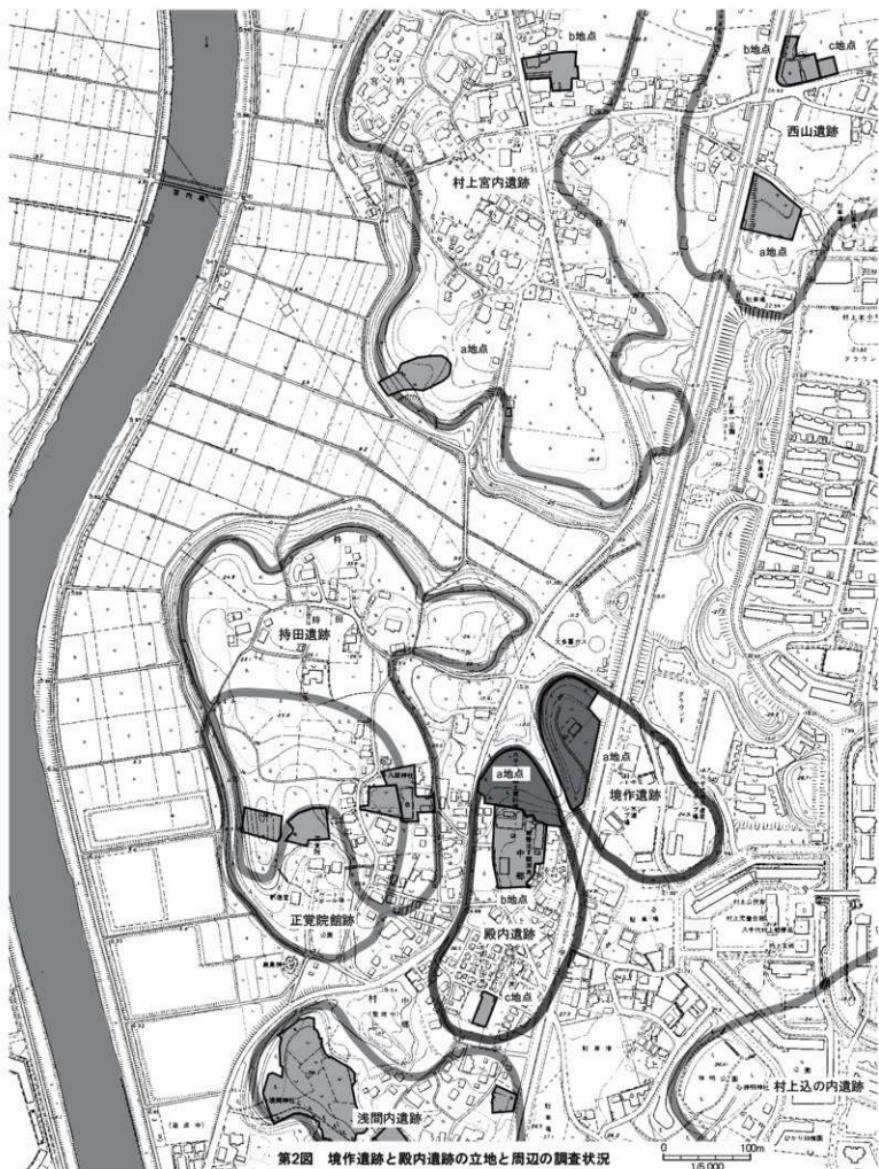
同年5月23日付で、これらの状況と市教委の意見を付して県教委に報告した。同年6月7日付け、県教委から照会地の一部に、土師器が散布する2ヶ所の埋蔵文化財包蔵地、約12,000m²が所在すると回答があり、その旨、照会者に送付した。

昭和60年7月17日、文化財保護法(以下「法」という。)第57条の2第1項(*1)の規定による土木工事の発掘届が同事業者から提出された。事業者との協議により、遺跡の状況を把握するための確認調査を実施することとなり、事業者から委託を受けた八千代市遺跡調査会(以下「調査会」という。)が埋蔵文化財包蔵地の範囲(境作遺跡の区域約7,000m²、殿内遺跡の区域約5,000m²)に対して、法第57条第1項(*2)の規定による埋蔵文化財発掘届を同年8月1日付で、市教委に提出した。準備の整った同年9月4日に確認調査を開始し、9月30日に終了した。その結果、奈良・平安時代の堅穴住居跡などの遺構の所在が確認され、境作遺跡約4,200m²、殿内遺跡約800m²について保存措置の必要な区域とされた。

市教委は事業者とさらに協議を重ね、保存措置の必要な区域に対して、記録保存のための本調査を実施することとなり、調査には引き続き調査会があたることとなった。そのため、調査会は記録保存する区域、合計約5,000m²に対して、法第57条第1項の規定による埋蔵文化財発掘届を提出し、準備が整った同年11月11日に本調査を開始した。

(*1) 平成16年5月法律第61号の改正により、現行の文化財保護法第93条第1項に相当

(*2) 同上、現行の文化財保護法第92条第1項に相当



第2図 境作遺跡と殿内遺跡の立地と周辺の調査状況

第2節 遺跡の位置と立地

八千代市は千葉県の北西部に位置し、都心から東へ約30km、千葉市の中心部から北へ約13kmの距離にある。地理的には房総半島の付け根の内陸部に位置し、地形としては印旛沼西岸の平坦な下総台地とそれを樹枝状に開拓する谷津や河川で形成されている。

市域の中心を南北に貫く新川は印旛沼水系に属している。新川は上流域で勝田川、下流域では平戸川と呼ばれていたが、千葉市の長沼一帯を水源としており、南から北に流下し、周囲の流れを集めて、平戸付近で流れを東に変え、印旛沼に流れ込む。新川左岸から高津川、桑納川、神崎川などの河川が合流し、大和田・睦・阿蘇の3つの区域に台地を区分している。

明治36年に参謀本部陸地測量部が作成した迅速測図によると、戦前までは市域の北部で印旛沼と接していたことがわかる。戦後の印旛沼の干拓工事で印旛沼の水域は大きく後退してしまったが、古来、市域は印旛沼から霞ヶ浦(香取の海)へ、さらに利根川(旧常陸川)を下って太平洋まで通じていた。

現在、大和田で東京湾水系の花見川へ疎水が開かれ、台風などの増水時には印旛沼・新川の水を大和田の排水機場により花見川から東京湾に流し、印旛沼周辺の洪水を防止している。この疎水を掘削した横戸周辺は印旛沼・太平洋水系と花見川・東京湾水系との分水界をなしている。

境作遺跡及び殿内遺跡は八千代市域のほぼ中央に位置し、新川の右岸、阿蘇地区の村上に所在する。

両遺跡は新川の中流域で右岸から合流する上相女谷津を新川から500mほど廻り、谷津の左岸に立地する。境作遺跡は上相女谷津に面して位置し、殿内遺跡は境作遺跡の西側の小さな谷津を入った正面に位置している。(第3回参照)標高は25~26m前後の台地上にあり、地質学上の地形面の区分では、下総上位面に立地する(文献1)。

調査対象となった両遺跡は、当該調査が行われた時点で、過去に発掘調査が行われておらず、遺跡の様相は全く不明であった。しかし、昭和48年8月から翌年1月まで発掘調査が行われ、昭和50年に報告書が刊行された『八千代市村上遺跡群』(※注1)で、「土取りの際に「たたら」が出土した遺跡であることが認められ、土取り後消滅した」との伝聞が紹介されている。この地点を辺田前田たら遺跡とし、位置図では、現在の殿内遺跡付近を示している。この報告がこの遺跡の性格の一端を知る初見とみられる。

境作遺跡の状況は、遺跡の中央部を国道16号線が南北に縦断し、その東側も、水道局村上ポンプ場が建設されており、包蔵地と判断される区域はほぼ壊滅している可能性が高い。

殿内遺跡の状況は、本報告のa地点以降、b地点の調査が市立歴史民俗資料館建設(現 市立郷土博物館)を目的として、平成2年8月から平成4年9月まで行われた。調査対象面積5,350m²に対して本調査が行われ、弥生時代の方形周溝墓1基、古墳時代前期の堅穴住居跡1軒、奈良時代の堅穴住居跡21軒、平安時代の堅穴住居跡13軒が検出されている。主に「奈良時代では7世紀末葉から8世紀前半の時期にピークが見られる。」(文献3)とされている。

また、殿内遺跡c地点(文献4)は、a地点より約200m南側に位置している。この地点の調査は、民間開発事業のための確認調査で、平成17年11月に行われた。調査対象面積499.95m²、確認された遺構は、奈良・平安時代の堅穴住居跡7軒、同掘立柱建物跡2棟であった。

※注1 参考文献2 本文編P3に記載。この伝聞は、故増田清蔵氏によるもので、正確な地点は不明である。また、同報告書 拡図編A図上では国道16号線上にマークされている。国道建設時に観察された所見かもしれない。



第3図 境作遺跡と殿内遺跡の周辺地形

0 500m 1km
1/20,000

第3節 周辺の遺跡

本跡で検出された遺構・遺物が古墳時代から奈良・平安時代を中心としていることから、本節では当該期における周辺の遺跡について概観する。

本跡の立地する上相女谷津は、その上流の向原堤上谷津と北側に分岐する上相女北側谷津で構成されている(第3図)。新川との合流地点近くの上相女谷津の右岸台地上に、遺跡面積の広大な村上宮内遺跡⁽¹⁾(文献5・6)が立地している。遺跡の全容はいまだ不明であるが、調査地点が2地点あり、わずかではあるが部分的に明らかになりつつある。a地点は昭和60年に公共事業に関連して調査が行われ、遺構の検出はみられず、遺物もわずかであった。b地点はa地点から北北東に約350m離れて位置している。台地の縁辺から

約200m離れた平坦部に立地し、2,043m²の区域の確認調査が行われている。古墳時代前期を主体とする11軒の堅穴住居跡や溝状造構、土坑などが検出されている。

村上宮内遺跡の対岸、上相女谷津の右岸には、持田遺跡(2)（文献7・8・9）が台地上に広く展開している。発掘調査は平成5年にa地点990m²が調査され、古墳時代後期の堅穴住居跡12軒ほか方形周溝状造構などが検出されている。さらに、平成9年にb地点1,588m²の確認調査が実施されたが、遺構は検出されず、わずかに土師器の散布がみられた。これ以降も、遺跡の南側で重複している中世の城館跡である正覚院館跡(3)（文献7・8・10・11）とともに、たびたび調査が行われている。

上相女谷津から分岐する上相女北側谷津の左岸には村上向原遺跡(6)が立地する。村上団地造成工事における調査では、弥生時代から奈良・平安時代までの遺跡とされているが、詳細はよくわからない。さらに、この谷津の奥には村上団地第1期造成工事において確認調査が行われ、現在の遺跡名では大塚遺跡(7)と大塚南遺跡(8)が所在していた。大塚遺跡(A区)はトレンチ調査が行われ、また、大塚南遺跡(B区)では最終的に全面表土剥ぎが行われたが、詳細については不明な点が多い。

また、この谷津の北側の最奥部には、西山遺跡(5)（文献12-13）があり、平成2年1月から4月にかけて発掘調査が行われ、古墳時代前期の堅穴住居跡3軒と平安時代の堅穴住居跡3軒などが検出されている。

向原堤上谷津の左岸には村上込の内遺跡(9)（文献2）が台地全体に展開している。昭和48年8月から翌年1月まで調査が行われ、奈良・平安時代の堅穴住居跡155軒、掘立柱建物跡24棟などが検出されている。この谷津の対岸となる同谷津右岸にも、昭和46年7月から8月に名主山遺跡(10)（文献14）の調査が行われ、平安時代の堅穴住居跡3軒、掘立柱建物跡8棟の小規模ではあるが、集落が確認されている。さらに、この谷津の奥は南北両側に伸びており、その東側縁辺に野路作遺跡(11)が所在する。現在は村上団地内に公園として現状保存されている。

以上が上相女谷津の流域における遺跡である。

この谷津の南側には沖塚低地が大きく開けている。この低地の北岸には縄文時代から奈良・平安時代へと続く浅間内遺跡(12)（文献6・15・16・17・18）が立地する。また、この遺跡に隣接して平安時代の堅穴住居跡が検出された白筋遺跡(13)が所在する。近くには市内でも数少ない前方後円墳の根上神社古墳(14)（文献6）が所在し、史跡として市の文化財の指定を受け、保存されている。

沖塚低地南岸の台地は、千葉段丘面と下総上位面で形成されている。千葉段丘面では、遺構の検出された遺跡は現時点までには確認されていないが、下総上位面に立地する遺跡は、貝化石岩で構築された石室を持つ沖塚古墳(15)や古墳時代の鍛冶造構などが検出されている沖塚遺跡(16)（文献15・18・19）が所在する。

さらに、市内の周辺の主な奈良・平安時代の遺跡では新川の対岸に広域な広がりを持つ萱田遺跡群とそれに隣接する遺跡がみられる。須久茂谷津、寺谷津、池ノ谷津周辺の台地上から菅地ノ台遺跡(22)（文献7・8・12・20・21・22）、權現後遺跡(23)（文献23・24・25）、ヲサル山遺跡(24)（文献26）、北海道遺跡(25)（文献24・27）、白幡前遺跡(26)（文献28・29・30）、池の台遺跡(27)（文献8・31・32・33）、川崎山遺跡(28)（文献15・33～49）などの遺跡群が広範囲に展開している。

また、北方の印旛沼周辺には、上谷遺跡(35)（文献50）、境堀遺跡(36)（文献51）、向境遺跡(37)（文献52）、栗谷遺跡(38)（文献53）などの集落群が展開し、印旛沼北岸にも鳴神山遺跡(65)、船尾白幡遺跡(66)などが展開する。

※注2 第3節の遺跡名の後に付記した（ ）は第I図の周辺遺跡の遺跡番号を示し、（文献）は10ページの参考文献のナンバーを示す。

第4節 確認調査の概要

調査の経過 昭和60年9月4日から調査を開始し、同年9月30日に終了した。

調査の方法

遺構や遺物の調査区域内での位置を特定するため、調査区全体に対し磁北を基線として10m方眼のグリッドを組み、この方眼を基準に測定した。そのため、境作遺跡及び殿内遺跡とも同一の方眼を基準として計測している。

確認トレンチはグリッドラインに沿って1m幅のトレンチを設定することを基本とした。

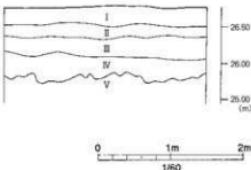
調査は全体の状況を把握するため、区域内の平坦部にグリッドラインに沿って8本、斜面部に任意の3本を設定した。境作遺跡側では平坦部の5本、斜面部の3本、合計約363m、約363m²の確認トレンチにより調査を行った。殿内遺跡側では平坦部から斜面部にかけてトレンチ3本、合計約84m、約84m²のトレンチ調査を行った。掘削面積は約447m²となり、調査対象面積に対して3.73%の調査を実施したこととなる。

標高の計測の基点としたベンチマーク等については不明である。

遺構確認面と土層

遺構の確認面は表土を除去し、黄褐色土層上面である。土層の観察と記録は境作遺跡台地上の良好な部分で実測し記録した。

- I層 表土層
- II層 茶褐色土層（テフラ層）
- III層 暗褐色土層（ローム漸移層）
- IV層 黄褐色土層（ソフトローム層）
- V層 黄褐色土層（ハードローム層）

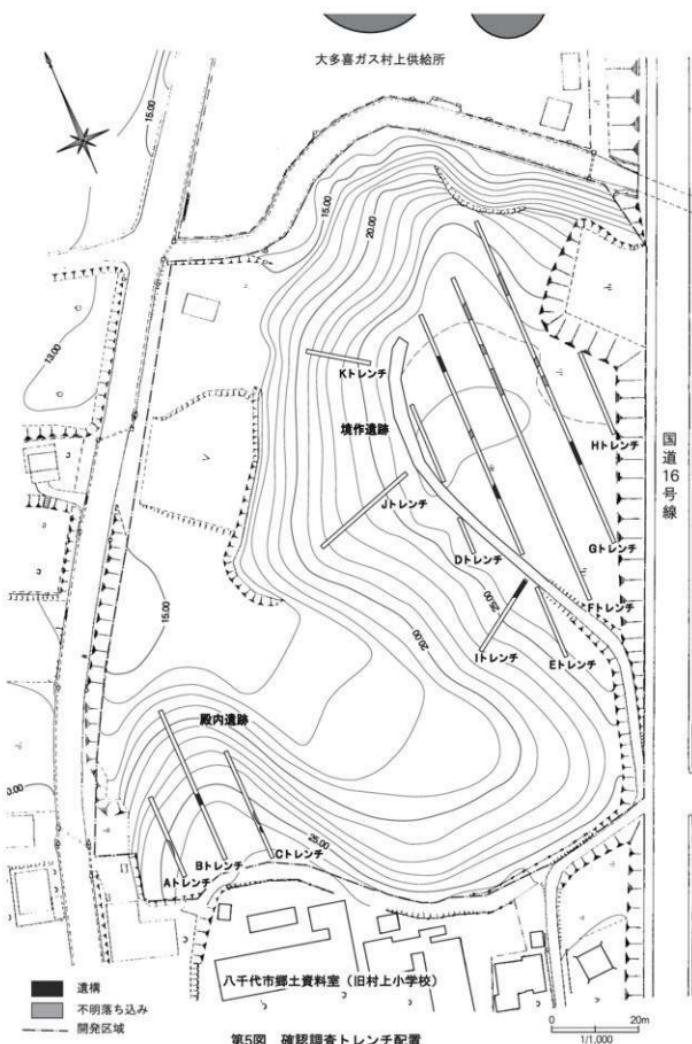


第4図 調査区の基本土層

確認調査の成果

確認調査直後の報告として、境作遺跡の区域では、古墳時代から平安時代と推定された堅穴住居跡が4軒、土坑3基、落ち込み9ヶ所を確認した。また、殿内遺跡区域では住居跡1軒、落ち込み3ヶ所を検出した旨の報告があった。

また、出土遺物としては、全体的に少なく、台地平坦部のトレンチからわずかに土師器が出土した。



第5節 本調査の方法と経過

調査区域

確認調査の結果、本調査対象区域が絞られた。殿内遺跡区域では約800m²。墳作遺跡区域では約4,200m²であった。斜面部から遺構の検出がみられなかったため、調査区域は平坦部に限定された。

調査の方法

表土剥ぎは、調査対象区域全面の表土を除去した。各種の実測は確認調査時のほぼ同一の基線で行い、遺跡全体の遺構測量は委託により実施した。出土遺物は表土中及び遺構内出土の遺物については、必要に応じて位置等を記録して取り上げている。

調査の経過と結果

本調査は昭和60年11月13日から翌61年1月13日まで実施している。

調査直後の報告では、殿内遺跡で竪穴住居跡1軒。墳作遺跡で13軒、土坑1基であった。住居跡の時期は不明なものが3軒と土坑1基あったが、他はいずれも奈良・平安時代のものと報告されている。

第1表 検出遺構一覧表

境作遺跡

遺構名	略称	種別	位 置 〔グリッド名〕	規 構 (m)			平面形態	中心軸方位	燃焼部	時代・時期	備 考
				中心軸	横軸	深さ					
1号住居跡	01H	竪穴住居跡	M4グリッド	3.32	3.46	0.50	方形	N16E	北壁中央 カマド	奈良時代	
2号住居跡	02H	竪穴住居跡	K4・L4 グリッド	3.64	4.42	0.45	長方形	N43E	北壁中央 カマド	奈良時代	
3号住居跡	03aH	竪穴住居跡	L5・M5 グリッド	3.62	3.37	0.48	略方形	N10E	北壁中央 カマド	奈良時代	3a重複(田)
3号住居跡	03bH	竪穴住居跡	L5・M5 グリッド	3.42	3.35	0.47	略方形	W42N	北西壁中央 カマド	奈良時代	3a重複(原)
4号住居跡	04H	竪穴住居跡	M5グリッド	3.87	4.18	0.61	略方形	W50N	北西壁中央 カマド	古墳時代 後期	
5号住居跡	05H	竪穴住居跡	K6グリッド	3.32	3.35	0.64	略方形	W36N	西壁中央 カマド	奈良時代	
6号住居跡	06H	竪穴住居跡	K7・S・L7 グリッド	4.88	4.52	0.39	略方形	N37E	なし	不明	
7号住居跡	07H	竪穴住居跡	N6, 7グリッド	3.77	4.28	0.51	台形	W60N	北東壁中央 カマド	不明	
8号住居跡	08H	竪穴住居跡	M7, S・N7 グリッド	7.44	7.74	0.58	方形	W48N	北西壁中央 カマド	奈良時代	
11号住居跡	11H	竪穴住居跡	M9, 10・N9 グリッド	3.40 (3.4)	2.03	0.23	推定台形	W76N	検出範囲では なし	不明	
12号住居跡	12H	竪穴住居跡	M10, 11 グリッド	5.90 (6.3)	0.50	推定方形	W56N	北西壁中央 カマド	奈良時代		
13号住居跡	13H	竪穴住居跡	L10, 11・M10, 11 グリッド	4.49 (2.46)	0.23	推定方形	W60N	北西壁中央 カマド	奈良時代		
14号住居跡	14H	竪穴住居跡	K8・10 グリッド	3.72	3.80 0~ 0.31	0~ 0.31	略方形	W61N	北西壁中央 カマド	奈良時代	
1号土坑	01P	土坑	L4グリッド	3.63	3.92	0.41	不整形	—	—	不明	

殿内遺跡

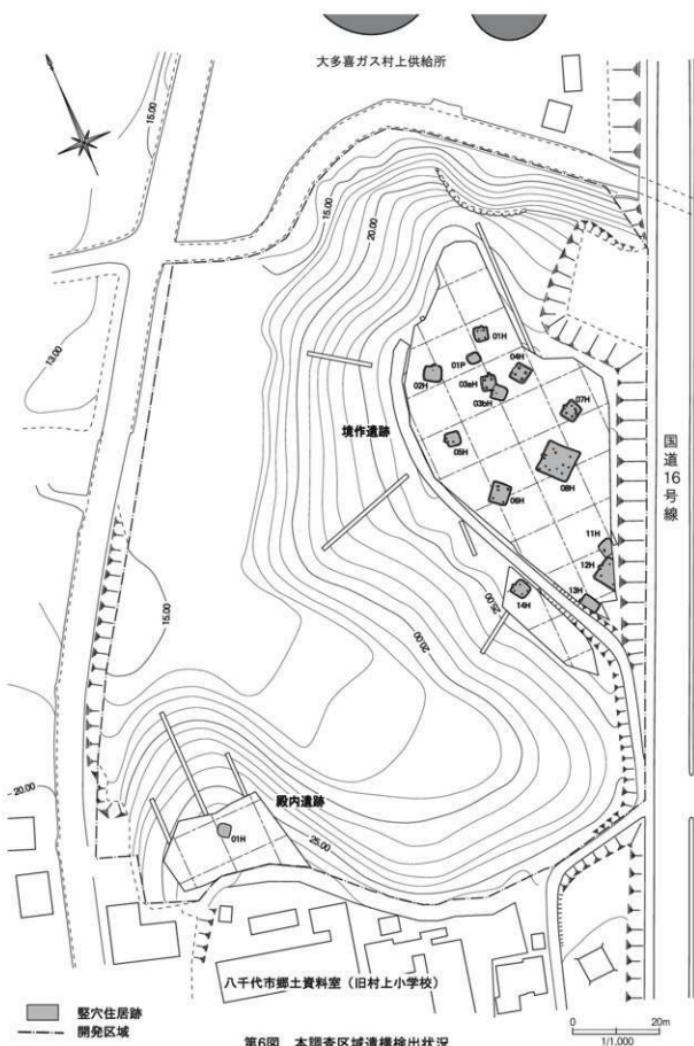
遺構名	略称	種別	位 置 〔グリッド名〕	規 構 (m)			平面形態	中心軸方位	燃焼部	時代・時期	備 考
				中心軸	横軸	深さ					
1号住居跡	01H	竪穴住居跡	C12グリッド	3.06	2.87	0.22	略方形	W34N	なし	奈良時代	

*竪穴住居跡の中心軸はカマドまたは火を温める方面的の中心軸とした。設定が不能な場合は壁ラインなどをもって代替えた。

*竪穴住居跡の規格は壁間に中点で結んだ中心線上の壁面を計測した。カマドに中心線があるときは、カマドがないものとしての壁ラインを基準とした。また、中心線が計測不能な場合、中心線を設定できない場合は壁長などを代替えとした。

*竪穴住居跡の方角は中心軸と本報告における磁北を基に、東西南北を基準として、時計回りの角度を計測し傾きを表示した。(90° 方式)

*住居跡等の深さは、遺構の確認深さから床面までの有効な計測値の平均とした。



第6図 本調査区域造構検出状況

参考文献

- 1 佐々木 茂 1981 「八千代市の地形・地質」 八千代市教育委員会「八千代市文化財総合調査報告書Ⅰ」
- 2 (財) 千葉県都市公社 1975 「千葉県八千代市上道跡群」 壇内遺跡b地点 一公共事業関連遺跡発掘調査報告書IV-1
- 3 八千代市教育委員会 2009 「千葉県八千代市 壇内遺跡b地点 一公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ-1」
- 4 八千代市教育委員会 2007 「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成18年度」
- 5 八千代市教育委員会 1987 「千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告書集」
- 6 八千代市教育委員会 2002 「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度」
- 7 八千代市教育委員会 1993 「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成4年度」
- 8 八千代市教育委員会 2005 「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成16年度」
- 9 八千代市教育委員会 2006 「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成17年度」
- 10 八千代市教育委員会 1999 「千葉県八千代市 正覚院跡 一埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」
- 11 八千代市教育委員会 1996 「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成7年度」
- 12 八千代市教育委員会 1990 「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成元年度」
- 13 八千代市教育委員会 2008 「千葉県八千代市 逆水遺跡f、北裏遺跡b、高津新田遺跡c、西山遺跡b、c、ほか-不特定遺跡 発掘調査報告書V-1」
- 14 名主山遺跡発掘調査会 1972 「名主山遺跡」
- 15 八千代市教育委員会 2000 「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度」
- 16 八千代市教育委員会 2003 「千葉県八千代市 浅間内遺跡発掘調査報告書 第5次本調査 第7次発掘調査」
- 17 八千代市教育委員会 2007 「千葉県八千代市 浅間内遺跡発掘調査報告書」(第2次本調査・第3次本調査)
- 18 八千代市教育調査会 2007 「千葉県八千代市 浅間内遺跡-白筋遺跡・冲塚遺跡-八千代市辺田前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 19 (財) 千葉県文化財センター 1994 「八千代市冲塚遺跡、上の台遺跡他 一東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書I-1」
- 20 八千代市教育委員会 1998 「千葉県八千代市 市内遺跡群発掘調査報告 曙和63年度」
- 21 八千代市教育委員会 1996 「八千代市埋蔵文化財調査年報 一平成6年度版」 平成6年度
- 22 八千代市教育委員会 1997 「八千代市埋蔵文化財調査年報 一平成7年度版」 平成7年度
- 23 (財) 千葉県文化財センター 1984 「八千代市極現後遺跡 一菅田地区埋蔵文化財調査報告書I-1」
- 24 (財) 千葉県文化財センター 1993 「八千代市極現後遺跡、北海道遺跡、井戸戸向遺跡 一菅田地区埋蔵文化財調査報告書VII-1」
- 25 八千代市教育委員会 2007 「千葉県八千代市 極現後遺跡 一公共事業関連遺跡発掘調査報告書II-1」
- 26 (財) 千葉県文化財センター 1986 「八千代市 パサル山遺跡 一菅田地区埋蔵文化財調査報告書III-1」
- 27 (財) 千葉県文化財センター 1983 「八千代 北海道遺跡 一菅田地区埋蔵文化財調査報告書II-1」
- 28 (財) 千葉県文化財センター 1991 「八千代市白崎前遺跡 一菅田地区埋蔵文化財調査報告書V-1」
- 29 八千代市教育委員会 2003 「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成14年度」
- 30 八千代市教育委員会 2009 「千葉県八千代市 白崎前遺跡c地点一同共住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I-1」
- 31 八千代市遺跡調査会 1980 「池ノ台遺跡発掘調査報告書 1979 八千代市都市計画街路3-4-1号線建設工事に伴う発掘調査報告書」
- 32 八千代市教育委員会 1986 「千葉県八千代市池の台遺跡-都市計画道路3・3・7号線造成工事に先行する緊急調査I-1」
- 33 八千代市教育委員会 1998 「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成8年度」
- 34 八千代市遺跡調査会 1980 「菅田町川崎山遺跡発掘調査報告 1979 八千代市都市計画街路3-4-1号線建設工事に伴う発掘調査報告書」
- 35 八千代市教育委員会 1994 「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成5年度」
- 36 八千代市遺跡調査会 1999 「千葉県八千代市 川崎山遺跡 一埋蔵文化財発掘調査報告書I-1」
- 37 八千代市教育委員会 1999 「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成10年度」
- 38 八千代市教育委員会 1999 「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成11年度」
- 39 2002 「千葉県八千代市 不特定遺跡発掘調査報告書 I」
- 40 八千代市遺跡調査会 2003 「千葉県八千代市 川崎山遺跡b地点-菅田町川崎山土地区画整理事業に先行する埋蔵文化財発掘調査報告書I-1」
- 41 八千代市教育委員会 2003 「千葉県八千代市 公共事業関連遺跡発掘調査報告書」
- 42 八千代市遺跡調査会 2004 「千葉県八千代市 川崎山遺跡b地点発掘調査報告書 一店舗建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書I-1」
- 43 八千代市遺跡調査会 2006 「千葉県八千代市川崎山遺跡b地点-一宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I-1」
- 44 八千代市教育委員会 2008 「千葉県八千代市 川崎山遺跡b地点-高津新田遺跡c、西山遺跡b、c、内野遺跡b、役山遺跡a、川崎山遺跡k-不特定遺跡発掘調査報告書V-1」
- 45 八千代市教育委員会 2008 「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成19年度」
- 46 八千代市教育委員会 2008 「千葉県八千代市 川崎山遺跡m地点発掘調査報告書」
- 47 八千代市教育委員会 2008 「千葉県八千代市 市内出土炭化木材分析委託報告書」(栗谷遺跡、川崎山遺跡d・n地点)
- 48 八千代市教育委員会 2008 「千葉県八千代市 川崎山遺跡n地点発掘調査報告書 一宅地開発事業に先行する埋蔵文化財発掘調査I-1」
- 49 八千代市遺跡調査会 2008 「千葉県八千代市 川崎山遺跡 一地点埋蔵文化財発掘調査報告書I-1」
- 50 八千代市遺跡調査会 2001-~ 「千葉県八千代市 上谷遺跡 (仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書II」第1~5分冊、第1分冊本文編
- 51 八千代市遺跡調査会 2005 「千葉県八千代市 境堀遺跡 (仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書IV」
- 52 八千代市遺跡調査会 2004 「千葉県八千代市 向堀遺跡 (仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書III」
- 53 八千代市遺跡調査会 2001-~ 「千葉県八千代市 栗谷遺跡 (仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書I」第1~3分冊、第1分冊本文編

第Ⅱ章 境作遺跡



第7図 境作遺跡の検出遺構

第1節 堪穴住居跡

本跡で検出された堪穴住居跡は、1号住居跡(01H)から14号住居跡(14H)までの13軒である。時代は古墳時代後期から奈良・平安時代のものである。

1号住居跡 (第8, 9, 10図・第2表・図版3)

位置 M4グリッド 規模 (中心軸×横軸×深さ) 3.32m×3.46m×0.50m

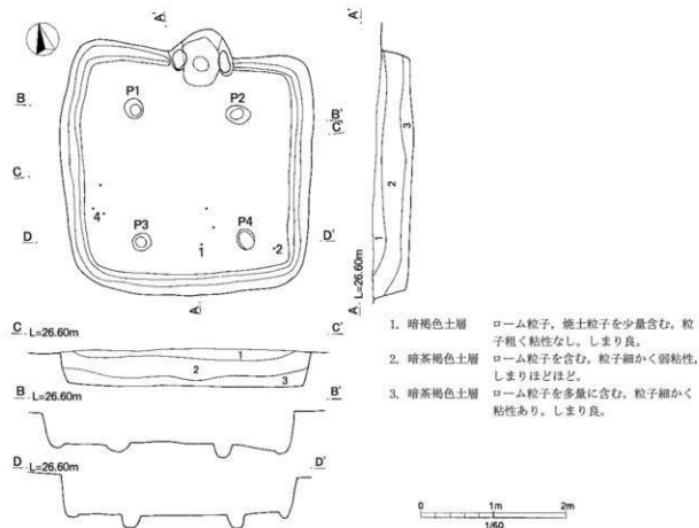
平面形状 間に丸みをもつ、壁に膨らみのある方形 中心軸方位 N16E

覆土土層 自然埋没

住居跡の構造

主柱穴: 4本柱。P1(28cm×26cm×深さ12cm), P2(27cm×36cm×深さ18cm), P3(25cm×26cm×深さ18cm), P4(30cm×25cm×深さ20cm)。主柱穴の掘り込みは4本とも浅い。また、柱穴の配置は中心軸方向1.80m, 横軸方向1.43m, 縦横比率(中心軸方向/横軸方向)は1.259で、カマドに向かって縦長の長方形状を呈する。一方、住居跡の平面形状の縦横比率(中心軸/横軸)は0.960の略方形を呈し、形状に相違がみられる。

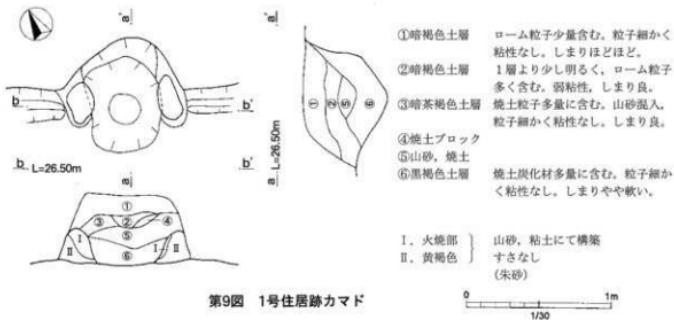
カマド: 北壁の中央に付設。カマド全体の規模は幅85cm×奥行80cmで、火床部の掘り込み(幅51cm×奥行67cm×深さ20cm)を壁ライン上に設ける。煙道は壁面を緩やかな半円状(幅170cm×奥行36cm)に掘り込み、



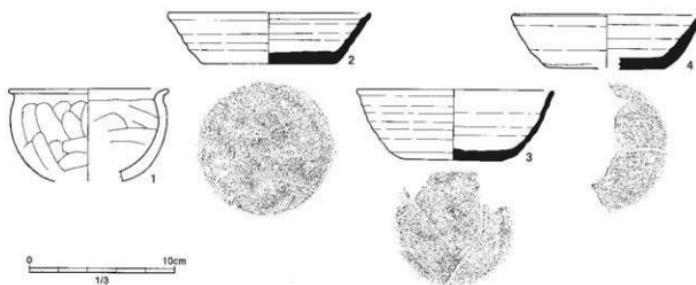
第8図 1号住居跡

煙道断面では、火床部から急傾斜に立ち上げる。カマド袖は、壁を掘り込んだ煙道内部から火床部を開むように構築しているが、壁ライン上にわずかに残存するのみであった。袖部は山砂と粘土で構築される。天井部及び焚口部は元の形状を留めていない。カマド下内部の最下層(⑥層)の黒褐色土層には、焼土や炭化材が多量に混入しており、土質もしまりなく、やややわらかく、住居廃絶時の状況をとどめる。

周溝：カマドの部分以外全周する。幅は14cm～20cmで、深さ5cm～8cmであった。



第9図 1号住居跡カマド



第10図 1号住居跡出土遺物

第2表 1号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	計測値 (cm)	遺存度	成形・形状・特徴		色調	胎土・焼成	備考
				外面	内面			
1	土器類 小型器	口径 底径 高さ	(10.7) — [6.4]	25%程度	外面 ヘラ削り、口縁内外側ナデ。内面 ヘラナデ	外面 明褐色 内面 朱紅色 に赤い斑	7.51B5/6 7.51B5/6	石英、長石 砂粒多く 焼成 良好 外面下辺にスヌ村 君
2	須世器 环	口径 底径 高さ	9.2 3.5	80%程度	ロクロ成形。底面切り離し後、全面ヘラ削り	外面 明褐色 内面 黄灰	2.51B5/6 2.51B5/6	石英、長石 砂粒多く 焼成 やや不良 焼きの悪い須世器
3	須世器 环	口径 底径 高さ	(13.7) (8.0) 4.9	70%程度	ロクロ成形。底面切り離し後、全面ヘラ削り	外面 云々輕 内面 灰黄	2.51B7/6 2.51B7/6	石英、長石 砂粒少 焼成 やや不良 焼きの悪い須世器
4	須世器 环	口径 底径 高さ	(13.2) (8.0) 3.8	50%程度	ロクロ成形。底面 ヘラ削り	外面、内面 共に灰白	7.51F7/6	石英 焼成 良好

出土遺物

造構の覆土中から出土した遺物は総数64点であった。内訳は土師器が26点で、器種は甕、壺類23点、壺、壺類が3点であった。須恵器は34点出土しており、器種は甕類21点、壺類13点であった。そのほかに繩文土器3点、石が1点出土している。全体に出土量は少ないが、須恵器の出土割合がやや多く、蓋の破片はみられない。

2号住居跡（第11、12、13図・第3表・図版4）

位置 K4・L4グリッド

規模(中心軸×横軸×深さ) 3.64m×4.42m×0.45m

平面形状 横長のやや不整な長方形

中心軸方位 N43E

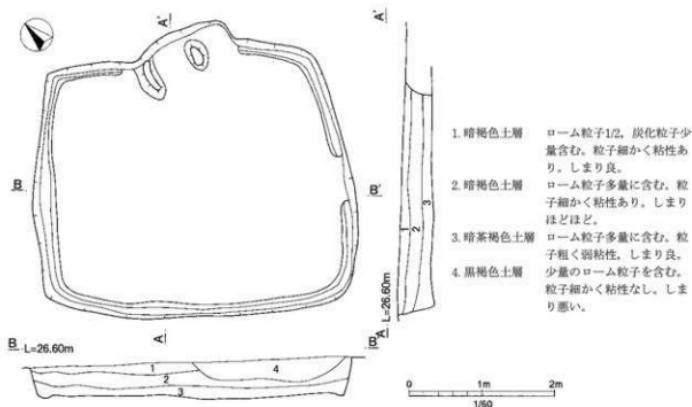
覆土土層 自然埋没。一部に後世の掘り込みがみられる。

住居跡の構造

主柱穴：未検出

カマド：北東壁の中央に付設。残存する袖部からすると斜めにカマドが構築されたかのように見える。壁面を掘りすぎている可能性もあり、定かではない。残存する平面規模は幅105cm、奥行73cmであった。火床部の掘り込みは検出されていない。煙道は壁面を20cmほど斜めに掘り込むようにみえる。袖の一部が残存する。山砂とロームブロックで構築される。天井部及び焚口部は遺存しない。カマド内部の土層の内容は記録なく不明。

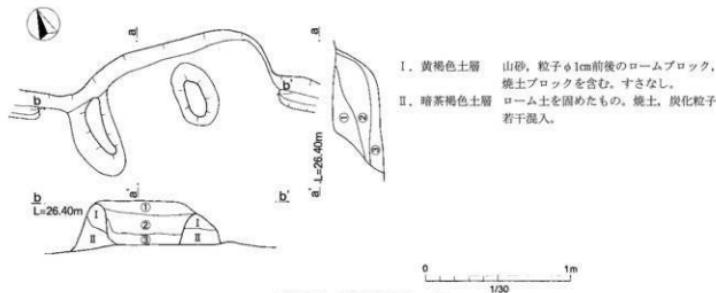
周溝：カマド以外一周するが、南東壁中央部に約60cmの範囲で途切れる。周溝の幅は12cm～20cmで、深さ約5cmと浅い。



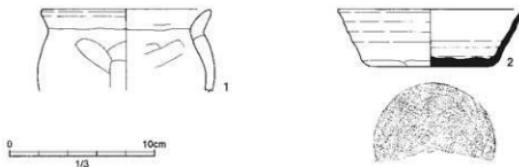
第11図 2号住居跡

出土遺物

遺構覆土中から出土した遺物は総数76点であった。内訳は土師器が69点あり、ほとんどを甕類が占めており、壺類は確認されていない。須恵器は5点出土しており、甕類2点、壺類3点であった。そのほかに陶器が1点、繩文土器(中期:加曾利E)が1点出土している。出土遺物の量は全体的に少なく、その中でも須恵器の出土はわずかで、土師器の甕が高い比率で占めていた。いずれも蓋類は確認されていない。



第12図 2号住居跡カマド



第13図 2号住居跡出土遺物

第3表 2号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	計測値 (cm)	保存度	成形・焼成・特徴	色調		胎土・焼成	備考
					外面	内面		
1	土師甕 小形甕	口径 (11.8) 底径 高さ [5.6]	20%程度	脚部 外面 ヘラ削り、口縁内外横ナデ。	黒褐 同	10YR1/1 石英、長石 やや多 焼成 良好	VS2H 内外面とも黒色	
2	須恵器 壺	口径 (13.0) 底径 高さ 8.5 3.8	50%程度	ロクロ成形、底部下端 ヘラ削り 切り離し後、底面 ヘラ削り	灰黄 同 口縁外表面と同じ 黒	2.517/2 石英、長石 砂粒やや多 須恵片まばら 焼成 良好	VS2H	

3a号住居跡 (第14, 15, 16図・第4表・図版4, 5)

位置 L.5, M5グリッド 規模 (中心軸×横軸×深さ) 3.62m×3.37m×0.48m

平面形状 南壁にやや膨らみをもつ略方形 中心軸方位 N10E

覆土土層 自然埋没

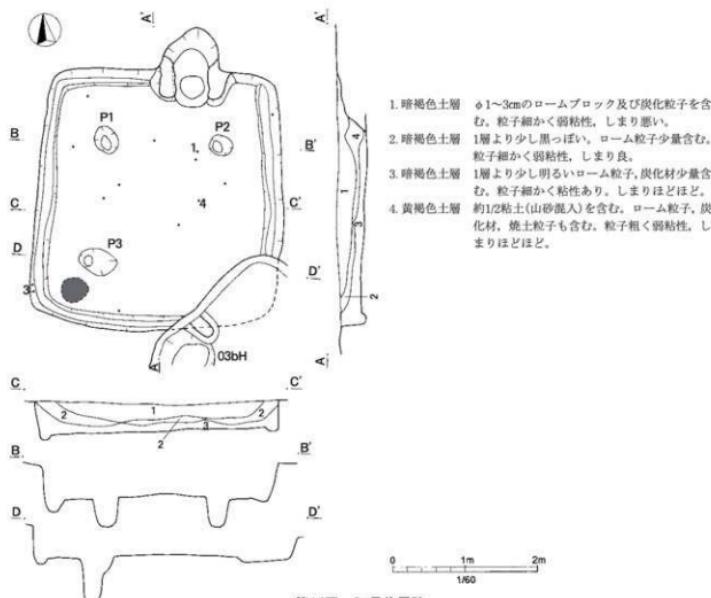
住居跡の構造

3b号住居跡と重複する。a号が古期でb号が新期と判断される。b号の床面がa号の床面を10cmほど深く掘り込んでいるため、a号の南東隅が欠損する。

主柱穴：4本柱が想定されるが、その内3本を検出した。P1(40cm×32cm×深さ41cm), P2(33cm×30cm×深さ41cm), P3(54cm×28cm×深さ66cm)。主柱穴は3本とも40cm以上の深い掘り込みがみられる。P3については平断面の形状から柱の掘り抜かれた可能性が想定される。残る1本の柱穴は未検出である。

柱穴の配置は、未検出のピットの位置を推定して計測すると、中心軸方向1.64m, 横軸方向1.54mとなり、縦横比率(中心軸方向/横軸方向)が1.065で、ほぼ方形状を呈している。住居跡の平面形状の縦横比率(中心軸/横軸)が1.074であり、両者の縦横比率はほぼ同じで、相似形を呈する。

カマド：北壁の中央から、やや東にずらして付設される。カマドの平面規模は横幅114cm, 奥行113cmである。火床部は幅50cm, 奥行82cm, 深さ20cmで、掘り込みを壁ライン上に設ける。煙道は壁面を緩やかな



第14図 3a号住居跡

半楕円形状に幅83cm、奥行60cm掘り込み、煙道の断面を緩やかに立ち上げる。カマドの袖は煙道端部から、ロームを基礎に山砂と粘土で構築される。残存する袖部は壁ライン上に約60cm残存する。

天井部及び焚口部の元の形状は残存しない。カマド内部煙道側や、本来の焚口付近の土層に天井部等の痕跡と思われる土層がみられる。

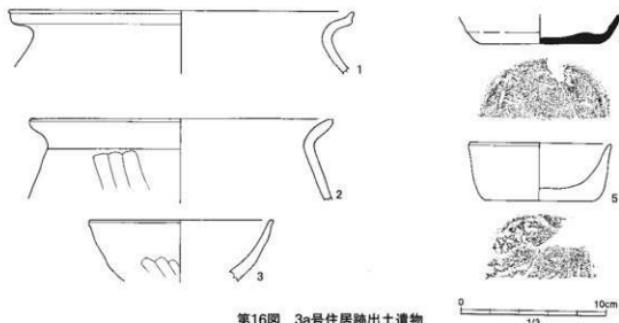
周溝：カマド及びカマドから北西隅まで検出されないが、そのほかは一周廻る。幅は18cm～20cm、深さ5cm～8cmであった。

出土遺物

造構覆土中から出土した遺物で、明らかにa号からの出土と判断できる総数は188点であった。内訳は土師器が165点あり、ほとんどを壺類が占め139点、うち小型の壺類7点、また、壺類25点であった。須恵器は19点出土しており、器種は壺類11点、壺類4点、不明4点であった。そのほかに陶器など2点、不明2点出

- ①住居跡覆土第1層 山砂、炭化粒子、施土粒子、ローム粒子、それぞれ少量含む。粒子細かく弱粘性。しまり良。
 - ②暗褐色土層 ϕ 1cm前後の焼土ブロック、炭化材及び山砂を1/2含む。粒子細かく弱粘性。しまりほど。
 - ③暗褐色土層 ϕ 2cmよりやや明るい、 ϕ 2cm前後の焼土ブロック多量に含む。粒子細かく弱粘性。しまり堅い。
 - ④暗褐色土層 ②層よりやや明るい、 ϕ 2cm前後の焼土ブロック多量に含む。粒子細かく弱粘性。しまり堅い。
 - ⑤粘土を含む山砂ブロック（黄炭褐色）
 - ⑥茶褐色土層 ローム粒子多量に含む。粒子細かく粘性あり。しまり良。
 - ⑦焼土層
-

第15図 3a号住居跡カマド



第16図 3a号住居跡出土遺物

第4表 3a号住居跡出土遺物觀察表

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	成形・整形・特徴	色調	施工・焼成		備考
						外面	内面	
1	土師器 甕	口径 底径 高さ	〔23.8〕 — 〔4.0〕	10%程度 胴部内外横ナデ 胴部内面ナデ	外面 雜 内面 にぶい褐色	2.5196/8 10187/4	石英・長石黑色細砂粒 多	YSHAT 口縁にスヌ村着 良好
						5196/6 5187/6	石英・長石 細砂粒 少	
2	土師器 甕	口径 底径 高さ	〔21.0〕 〔21.0〕 〔5.6〕	10%程度 胴部外表面 縦線のヘラ削り、内面縦位のヘラナデ 口縁内面横ナデ	外面 にぶい褐色 内面 雜	7.5195/4 7.5187/7	石英・長石 細砂粒 少 少	YSHB 良好
						7.5195/6 7.5187/7	石英・長石 細砂粒 少	
3	土師器 甕	口径 底径 高さ	〔12.8〕 〔12.8〕 〔4.2〕	35%程度 外曲の変形は部分的でまだ残る、内曲は口縁から全体部まで進度、わずかに残る底部は黒安なし	外面 にぶい褐色 内面 黒	7.5195/4 7.5187/7	石英・長石 細砂粒 少 少	YSHB14 内面に炎の痕跡のようすにスヌ村着、灯明組か
						7.5195/6 7.5187/7	石英・長石小砂粒 少	
4	須恵器 甕	口径 底径 高さ	〔8.5〕 〔2.0〕	35%程度 口縁外側 底面切り離し後、ヘラ削り	外面 灰白 内面 灰白	7.5187/1	石英・長石 細砂粒 少 少	YSHAI1 良好
5	土師器 甕	口径 底径 高さ	〔10.0〕 〔7.8〕 〔4.0〕	40%程度 体部下半 縦線のナデ、口縁内外横ナデ。 体部内側 横位のナデ	外面 にぶい褐色 内面 黒	7.5195/4 7.5187/1	石英・長石細砂粒 少 少	YSHAI1 灰底に木葉斑 良好

上している。

その内、カマド内から出土したと推定されるもの(※1)が56点あった。土師器が53点あり、甕類が30点、小型の甕類4点、壺類18点であった。壺類には赤彩されているもの多かった。他不明1点。須恵器は小片1点出土している。ほか不明2点であった。これらの土器は住居跡の覆土中から出土するものとやや異質な感がある。また、a号、b号のどちらに帰属するか不明のもの(※2)についてはb号に記載する。

※1遺物の注記に「3HAフ」「3HAカ」。最後の文字をカタカナと推測。「フ」は覆土中、「カ」はカマド内出土と推定した。

※2遺物の注記に「3H」のみのものがあり、a、b重複部分からの出土と判断し、帰属不明とした。

3b号住居跡(第17、18、19図・第5表・図版5)

位置 L5, M5グリッド 規模(中心軸×横軸×深さ) 3.42m × 3.35m × 0.47m

平面形状 囲に丸みをもつ略方形 中心軸方位 W42N

覆土土層 基本は自然埋没。住居跡の中央付近に一部人為的な埋め戻しあり堆積がある。

住居跡の構造

3a号住居跡との重複。a古⇒b新と判断。床面の高低差でb号が10cmほど深い。新旧分析のための覆土堆積を判断できる土層が取られていなかったが、重複部分でb号のカマド構造部分が破壊されていないことから、b号を新と判断した。

主柱穴: 未検出

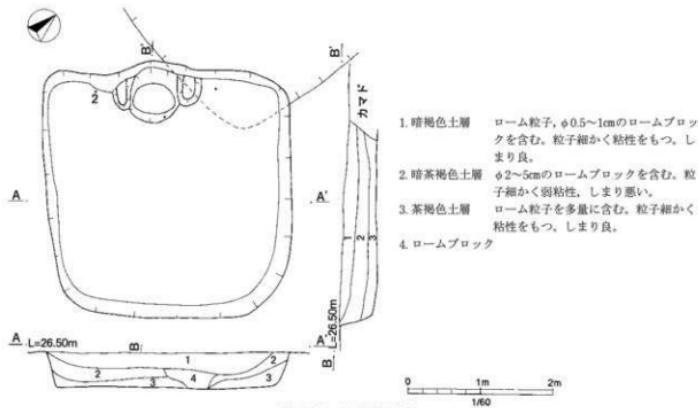
カマド: 北西壁の中央からわずかに西にずれて付設。カマドの平面規模は幅120cm、奥行85cmである。火床部の掘り込みは幅67cm、奥行77cm、深さ5cmで、壁ラインよりやや住居内側の床面に設ける。煙道は壁面を幅広くわずかに削り(幅130cm×奥行17cm)、断面を急傾斜で立ち上げる。残存する袖部も壁ラインよりも内側で、ロームを基礎に山砂と粘土で構築される。天井部及び焚口部は残存しない。カマド内部に天井部の崩落と思われる土層がみられる。

周溝: 未検出

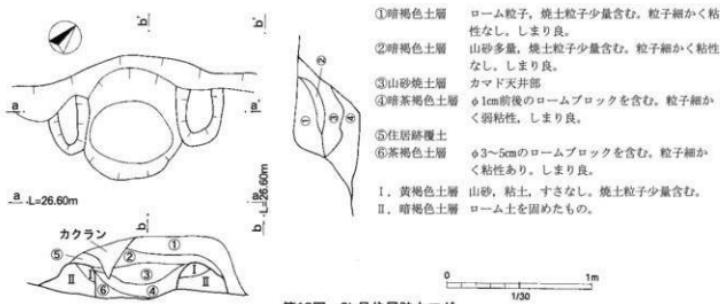
出土遺物

b号に帰属する遺物の総数は32点であった。内訳は土師器が23点あり、ほとんどを甕類が占め、22点、壺類1点には赤彩されていた。須恵器は7点出土しており、甕類2点、壺類5点であった。そのほかに繩文土器(中期:加曾利E)1点、磁器1点が出土している。

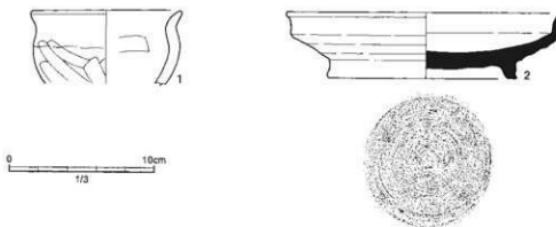
a号、b号のどちらに帰属するか不明のものは土師器の小片24点、粘土塊1点の総数25点であった。



第17図 3b号住居跡



第18図 3b号住居跡カマド



第19図 3b号住居跡出土遺物

第5表 3b号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	計測値 (cm)	遺存度	成形・整形・特徴		色調	埴土・焼成	備考
				口縁内外側ナゲ 割合	割合			
1	土師器 小型甕	口径 (10.5) 底径 (5.1)	— 20%精度	割合	割合	内外面 内面褐	石英・長石細砂粒 2.5185/6	やや多 焼成 良好 YSHB
2	須恵器 高台付瓶	口径 (19.0) 底径 (12.5) 高さ 4.5	95%精度	ヨクロの削り 底部の削り	削り付け後、回転ナガ削り。	外面 灰 内面 灰黄	7.516/1 2.516/2	石英・長石 砂粒 多 焼成 良好 底面に「×」麻刺 YSHB1

4号住居跡 (第20、21、22、23図・第6表・図版6)

位置 M5グリッド 規模(中心軸×横軸×深さ) 3.87m×4.18m×0.61m

平面形状 やや横長の略方形、縦横がやや歪む 中心軸方位 W50N

覆土土層 自然埋没

住居跡の構造

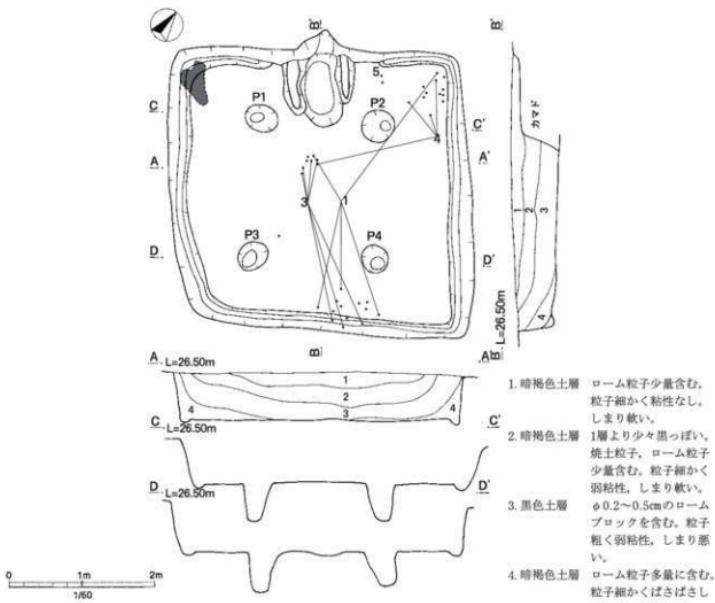
主柱穴：4本柱。P1(47cm×35cm×深さ52cm), P2(47cm×40cm×深さ52cm), P3(45cm×35cm×深さ49cm), P4(40cm×30cm×深さ55cm)。主柱穴は4本とも50cm前後の深い掘り込みがみられる。柱穴は中心軸方向1.97m, 横軸方向1.78mで、縦横比率(中心軸方向/横軸方向)1.107となり、カマドに対してやや縦長に配置される。住居跡の平面形状の縦横比率(中心軸/横軸)が0.926で、やや横長であるのに対し対称的に相違する。

カマド：北西壁のほぼ中央に付設される。カマド全体の規模は幅100cm, 奥行134cmである。火床部の掘り込みは幅53cm, 奥行101cmの縦長で、深さ10cm。壁ラインより内側の床面上に設ける。煙道は壁面をわずかに(幅90cm×奥行28cm)掘り込み、断面を急傾斜に立ち上げる。残存する袖部は壁から60cmから75cmほど残存するが、高さではなく、天井部及び焚口部の元の形状は残存しない。袖部はロームを土台に山砂と粘土で構築される。天井部が崩落した痕跡はみられない。カマド底面に焼土(第5層)が厚く堆積している。また、カマド内部からは完形の支脚(10, 11), 破損した支脚(9)や坏(6, 7)が出土する。カマドの左側の袖上から甕(2)が完形で出土し、坏(8)もカマド左袖外側の甕(2)の脇から出土している。

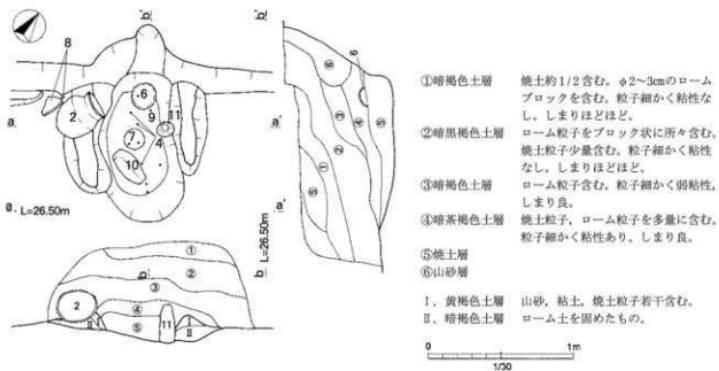
周溝：カマド周辺を除き全周する。幅は16cm～20cmで、深さ6cm～10cmであった。

出土遺物

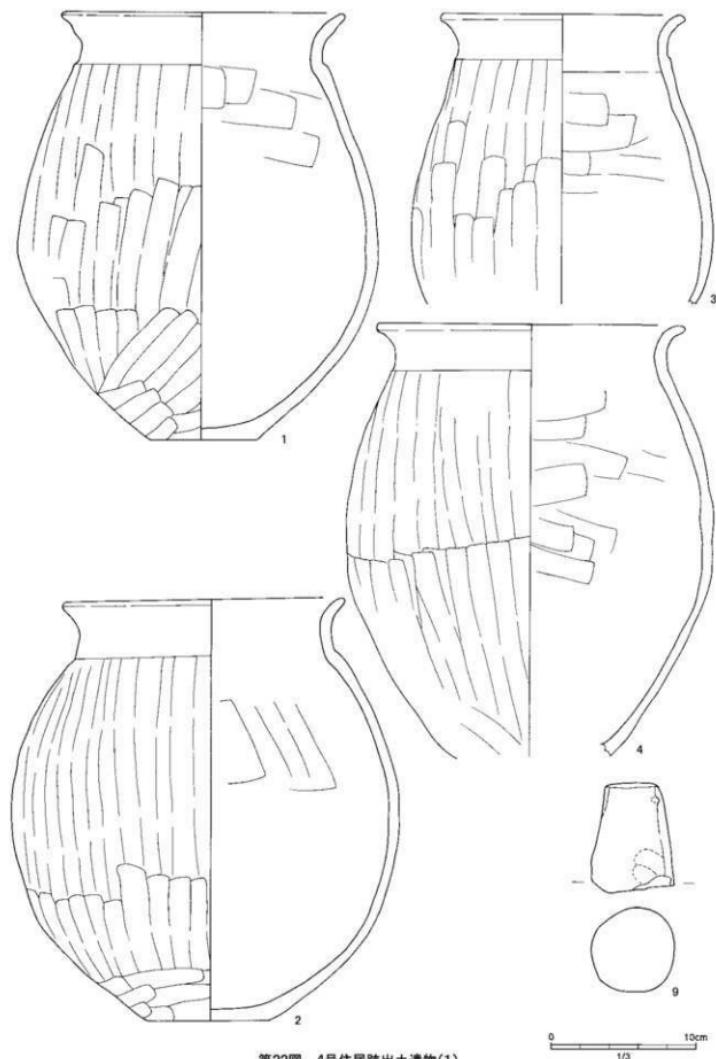
出土した遺物の総数は200点であった。内訳は土師器が187点あり、ほとんどを甕類が占め、146点、坏類23点、小片18点であった。須恵器は6点出土しており、甕類1点、坏類4点、蓋1点であった。そのほかに陶器1点、支脚片5点、植木鉢1点が出土している。



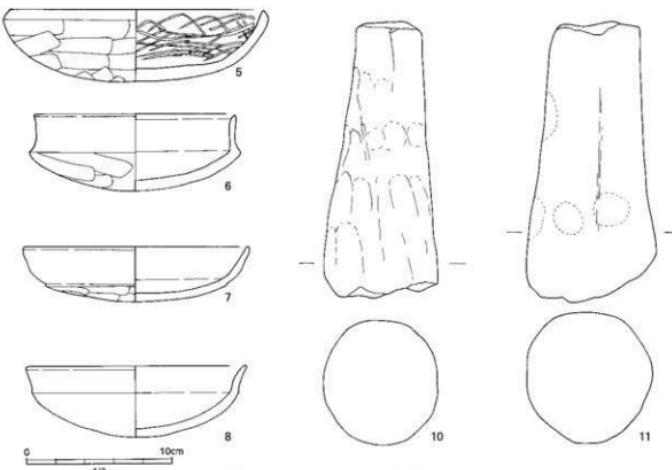
第20図 4号住居跡



第21図 4号住居跡カマド



第22図 4号住居跡出土遺物(1)



第23図 4号住居跡出土遺物(2)

第6表 4号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	成形・整形・特徴		色調	胎土・焼成	備考
				腹部外曲は上位から中位にかけて縦位のヘラ削り	外曲・赤褐色～黒色			
1	土師器 甕	口径 底径 高さ	19.6 17.2 28.6	60%程度	下方も斜位にヘラ削りを2段。	108.8～108.7/7.1/7.1 赤～茶～墨	石英・長石 細砂粒 多 焼成 良好	TS4H3. 2, 5, 8, 10, 11, 12, 17, 20, 30, 3, 215
2	土師器 甕	口径 底径 高さ	19.6 8.2 28.4	100%	腹部外曲は上位から中位にかけて縦位のヘラ削り。 底部付近には横ナギ。	外曲 にぶら黄褐色 107.7/3 にぶら灰褐色	石英・長石 細砂粒 多 焼成 良好	TS4H3. 2 胎部外曲に黒斑 胎部内部に黒斑と スズが付着
3	土師器 甕	口径 底径 高さ	(17.0) — (20.0)	25%程度	腹部外曲は縦位のヘラ削り。	外曲 にぶら灰褐色 7.5188/6	石英・長石 黒色等 細砂粒 やや多 焼成 良好	TS4H3. 4, 13, 26 27, 28, 29, 31, 32, 33 内面にスズ付着
4	土師器 甕	口径 底径 高さ	21.2 (18.5) (30.0)	30%程度	腹部外曲は上位から下位まで縦位2段のヘラ削り。 底部付近は横位ナギ。	外曲 黄褐色～土体に黒 7.5188/8～7.5188/1 内面浅黃褐色～土体に黒 7.5188/6～7.5188/1	石英・長石 細砂粒 多 焼成 良好	TS4H3. 16, 18, 21, 25, 方5, 方6, 方10
5	土師器 甕	口径 底径 高さ	17.8 5.0	100%	体部外曲横位のヘラ削り。 口縁外周部ナギ。内面に密なミガキ。丸底	外曲 にぶら黄褐色 10186/4 内面 にぶら灰褐色 7.5185/3	石英・長石 細砂粒 多 焼成 良好	TS4H4 内外表面に黒斑
6	土師器 甕	口径 底径 高さ	(13.8) — 5.3	80%程度	体部外曲多く削り、『ギヤー型』がまばらに残る。 口縁内周部ナギ。内曲面にミガキ。丸底。高さ を高く復元させる。	外曲 底面 にぶら灰褐色 10188/7 内面 底面 にぶら灰褐色 10188/6	全体に少しふい 石英・長石 黑砂粒 少 焼成 良好	研力4 外曲一部黒斑し、 スズ付着
7	土師器 甕	口径 底径 高さ	15.6 — 3.8	100%	体部外曲横位のヘラ削り。 口縁外周部ナギ。内面にヘラナギ。丸底	外曲 底面 にぶら灰褐色 5187/6 内面 底面 にぶら灰褐色 10188/6	石英・長石 細砂粒 少 焼成 良好	TS4H4 口縫から底面にス ズ付着
8	土師器 甕	口径 底径 高さ	15.3 4.9 —	80%程度	体部外曲横位のヘラ削り。 口縁外周部ナギ。内面にナギ。丸底	外曲 底面 にぶら灰褐色 2.5186/7 内面 底面 にぶら灰褐色 1084/6	石英・長石 細砂粒 多 焼成 良好	TS4H4. フ. カ. カし カ2
9	土製品 支脚	口径 底径 高さ	— — (7.7)	50%以下	指頭により成形、上半部のみ残存	外曲 にぶら黄褐色 10187/7	石英・長石 細砂粒 やや多 焼成 やや不良	4KH12
10	土製品 支脚	口径 底径 高さ	4.0 — (11.1)	90%程度	指頭により成形、下端部で欠損の可能性あり	外曲 にぶら灰褐色 7.5187/4	石英・長石 細砂粒 多 焼成 やや良	4KH11
11	土製品 支脚	口径 底径 高さ	(5.9) 8.9 19.9	90%以下	指頭により成形、下端部欠損	外曲 にぶら灰褐色 7.5187/4	石英・長石 細砂粒 多 焼成 やや良	

5号住居跡 (第24, 25, 26図・第7表・図版7)

位置 K6グリッド 規模(中心軸×横軸×深さ) 3.32m×3.35m×0.64m

平面形状 圓に丸みをもつ略方形 中心軸方位 W36N

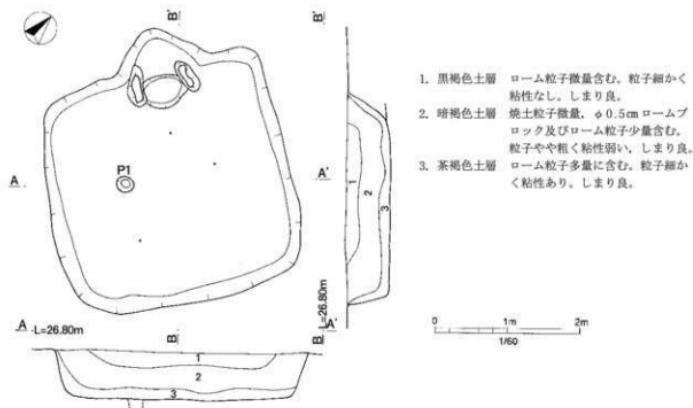
覆土土層 自然埋没

住居跡の構造

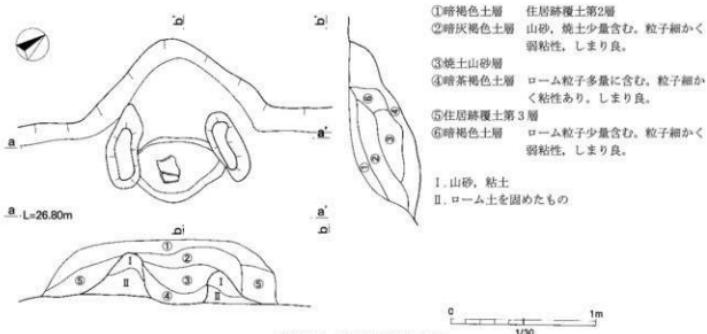
主柱穴：未検出 床面中央付近からピットを1基検出しているが、主柱穴とは認識できない。P1(25cm×22cm×深さ22cm)。

カマド：北西壁のほぼ中央に付設される。カマド全体の平面規模は幅97cm、奥行113cmである。

火床部の掘り込みは、横幅59cm、奥行44cmの横長の形状で、深さは5cmである。壁ラインより内側の床



第24図 5号住居跡



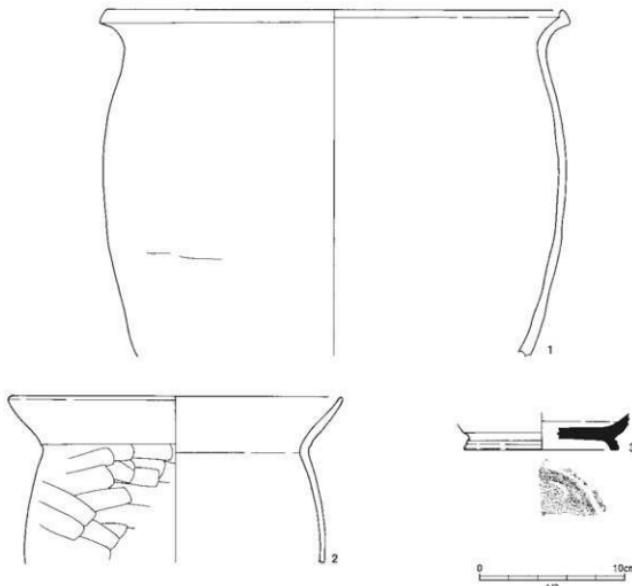
第25図 5号住居跡カマド

面上に設ける。煙道は壁面に丸みをもった三角形状(幅140cm×奥行52cm)に掘り込み、煙道の断面を緩やかに立ち上げる。残存する袖部は壁ラインから50cmから60cmほど残存する。ロームを土台に山砂と粘土で構築される。天井部及び焚口部は残存しない。カマド内部の土層にも天井部の崩落した痕跡はみられないが、中位層に焼土(第③層)が厚く堆積している。

周溝：未検出

出土遺物

出土した遺物の総数は210点であった。内訳は土師器が194点あり、ほとんどを壺類が占め、178点、瓶16点であった。須恵器は13点あり、甕類12点、壺類1点が出土している。そのほかに銭貨(鉄サビが激しく不明)1点、その他に不明なもの2点が出土している。



第26図 5号住居跡出土遺物

第7表 5号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	成形・整形・特徴		色調	胎土・焼成	備考
				外面にぶら赤褐	内面にぶら褐色			
1	土師器 壺	口径 底径 高さ	(32.4) — (24.0)	20%程度	脚部外曲 ナギ、口縁内外横ナギ。 脚部内面ヘラナギ	石英、長石 砂粒少 青滑片 少 焼成 良好	YSSH	
2	土師器 壺	口径 底径 高さ	(23.0) — (11.5)	20%程度	脚部はヘラ削りにより薄手。口縁大きめに開く。 脚部外曲。斜方向へのヘラ削り、口縁指添による成形痕が残るが、内外横ナギ。脚内部ヘラナギ。	内外面 稲 2.5196/6	石英、長石細砂粒 多 焼成 良好	YSSH
3	須恵器 高台付杯	口径 底径 高さ	— (10.8) (2.5)	20%程度	ロクロ成形	内外面 稲 7.5194/1	石英、長石 種小砂粒 青滑小片 多 焼成 良好	YSSH フ

6号住居跡 (第27, 28図・第8表・図版7)

位置 K7, 8・L7, 8グリッド

規模(長軸×横軸×深さ) 4.88m×4.52m×0.39m

平面形状 長軸とした方がわずかに長い、略方形

長軸方位 N37E

覆土土層 自然埋没

住居跡の構造

主柱穴: 4本柱。P1(35cm×35cm×深さ23cm), P2(45cm×37cm×深さ24cm), P3(34cm×30cm×深さ18cm), P4(40cm×28cm×深さ48cm) 主柱穴と想定される4本は18~48cmの掘り込みがみられる。これらの主柱穴の配置は長軸方向3.03m, 横軸方向2.48m, 縦横比率(長軸方向/横軸方向)1.222で、住居跡の長軸に対して縦長の長方形状に配置される。住居跡の平面形状の縦横比率(長軸/横軸)が1.080の略方形であるとのやや相違する。また、住居跡の長軸と柱穴配置の長軸方向には、相対的に位置及び方向にズレがみられる。

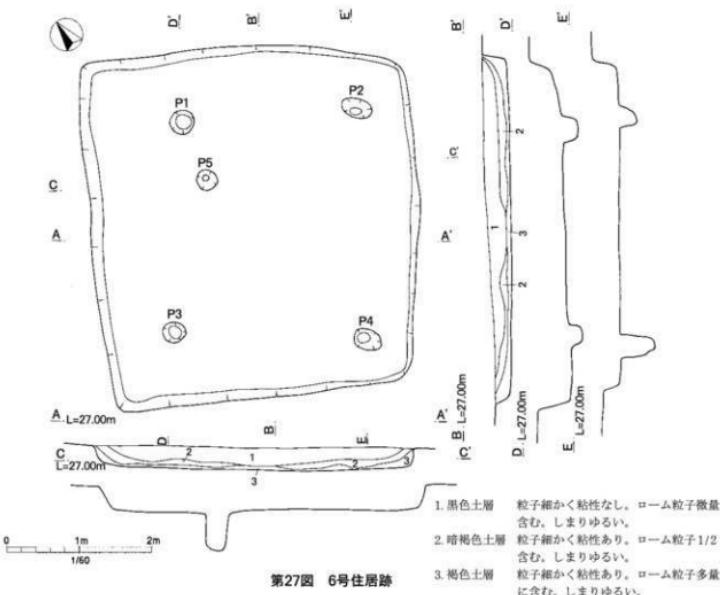
その他のピット: 北隅側にP5(30cm×29cm×深さ52cm)があるが、用途不明。

炉: なし

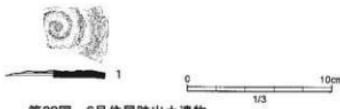
周溝: 未検出

出土遺物

遺物の総数は5点。土師器の壺1点、須恵器の壺1点、縄文土器2点(前期: 黒浜1点、中期加曾利E1点)、石1点が出土している。



第27図 6号住居跡



第28図 6号住居跡出土遺物

第8表 6号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	計測値(cm)	保存度	成形・整形・特徴	色調	断面・機成	備考
1	葉形 环	口径 高さ	— —	10%程度 ロクロ成形。切り離し後ヘラ削り	外面 灰白・灰 7.517/1 ~ 7.516/1 裏面細片 多 機成 良好	石英・長石 種小砂粒 やや多	VSGH4 环底部と判断

7号住居跡 (第29、30、31図・図版8)

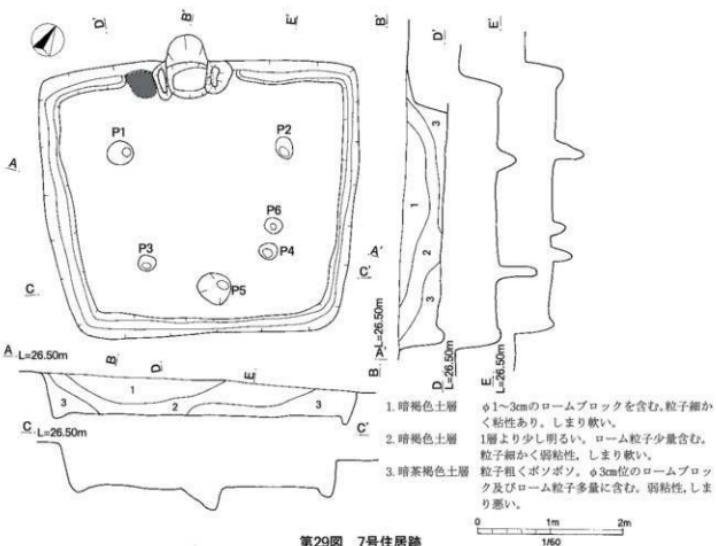
位置 N6, 7グリッド

規模 (中心軸×横軸×深さ) 3.77m × 4.28m × 0.51m

平面形状 横長でカマド側の壁面が長い台形状

中心軸方位 W60N

覆土土層 自然埋没

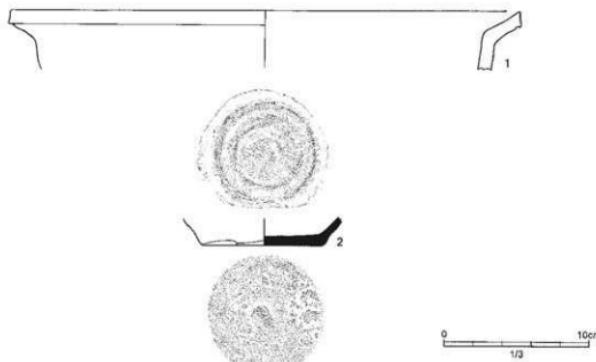
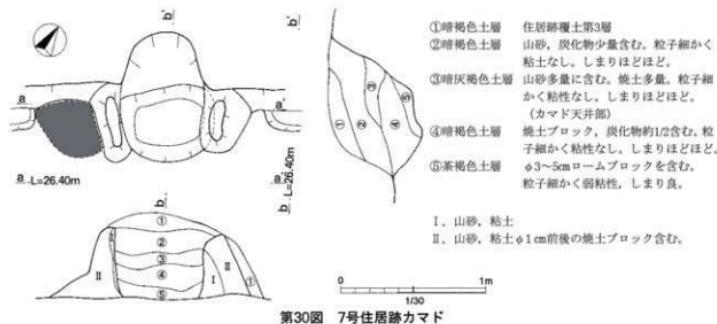


第29図 7号住居跡

住居跡の構造

主柱穴：4本柱を検出する。P1(35cm×35cm×深さ27cm), P2(32cm×23cm×深さ40cm), P3(23cm×23cm×深さ57cm), P4(26cm×24cm×深さ28cm)。各主柱穴には27~57cmの掘り込みがみられる。これらの主柱穴の配置は中心軸方向1.48m, 横軸方向1.90mで、縦横比率(中心軸方向/横軸方向)0.779となり、カマドに対して横長の形状を示すが、カマド側の柱穴間がやや長く、逆台形状を呈している。住居跡の平面形状の縦横比率(中心軸/横軸)0.881に対して、ほぼ同じ比率を示し、また、形状的にもカマド側の壁面が長い逆台形状である。両者の縦横比率及び形状から、相似形を呈する。

その他のピット：南東壁側の中央付近にP5(48cm×45cm×深さ32cm)が検出される。位置的には、出入口施設のためのピットが想定される。P4の北側にP6(25cm×23cm×深さ20cm)が検出されている。P4とP2間に位置しているので、補助柱穴の可能性もあるが不明。



カマド：北西壁のほぼ中央に付設される。カマドの平面規模は幅112cm、奥行90cmである。火床部の掘り込みは幅64cm、奥行52cmの横長で、深さ28cm、壁ラインの内側の床面上に設けられる。

煙道は、壁面を楕円形状に横幅63cm、奥行38cmで掘り込み、断面を急傾斜で立ち上げる。袖部は壁から30cmから40cmほど残存する。天井部は内部に落ち込んでいるとみられる。焚口部の形状は定かではない。袖部分は山砂と粘土で構築される。カマド底面近くに焼土(第④層)が厚く堆積している。

周溝：カマド周辺を除き全周する。幅15cm～27cm、深さは6cm～12cmであった。

出土遺物

遺物の総数は12点。土師器の壺類8点、須恵器の壺類1点、繩文土器3点(前期:黒浜3点)が出土している。

第9表 7号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	成形・形状・特徴		色調	磨石・焼成	備考
				外面	内面			
1	土師器 壺	口径 底径 高さ	(35.2) — [4.0]	10%以下 白線内外模ナヂ、剥以下不明	黒泥 101kg/1 10186g/3	石英・粗砂粒 少 雲母細片 やや多 10186g/3	磨石・焼成 良好	YSTB
2	須恵器 壺	口径 底径 高さ	8.3 — [2.0]	30%程度 ロクロ成形。体部下端にヘラ削り。切り削し後へ ラ削り。	内外面 灰白	7.577/ 10186g/3	石英・粗砂粒 少 雲母細片 多 焼成 良好	YSTB 壺の内外面に 「×」縦刻

8号住居跡 (第32、33、34、35、36図・第10表・図版8、9)

位置 M7、8・N7グリッド 構造 (中心軸×横軸×深さ) 7.44m×7.74m×0.58m

平面形状 方形 中心軸方位 W48N

覆土土層 自然埋没

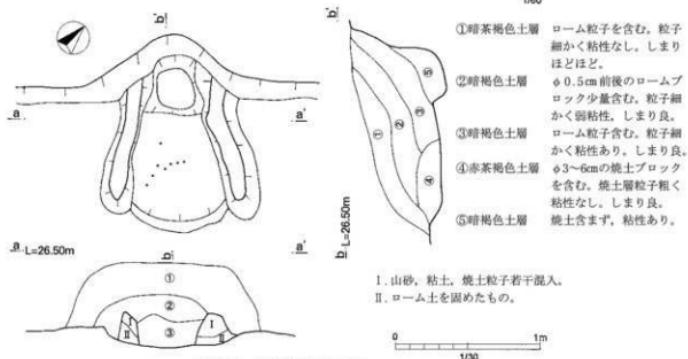
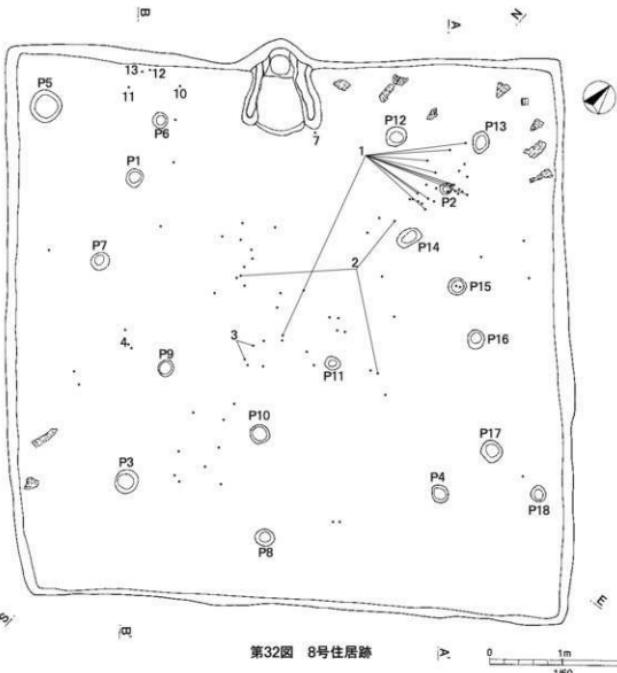
住居跡の構造

主柱穴：4本柱を検出する。P1(25cm×22cm×深さ55cm)、P2(18cm×15cm×深さ70cm)、P3(34cm×30cm×深さ58cm)、P4(28cm×23cm×深さ58cm)。それぞれの主柱穴は55～70cmの掘り込みがみられる。これらの主柱穴の配置では、中心軸方向4.20m・横軸方向4.30mと計測され、縦横比率(中心軸方向/横軸方向)0.977で、ほぼ方形状に配置される。住居跡の平面形状の縦横比率が(中心軸/横軸)0.961であり、柱穴配置とはほぼ相似形となる方形であった。

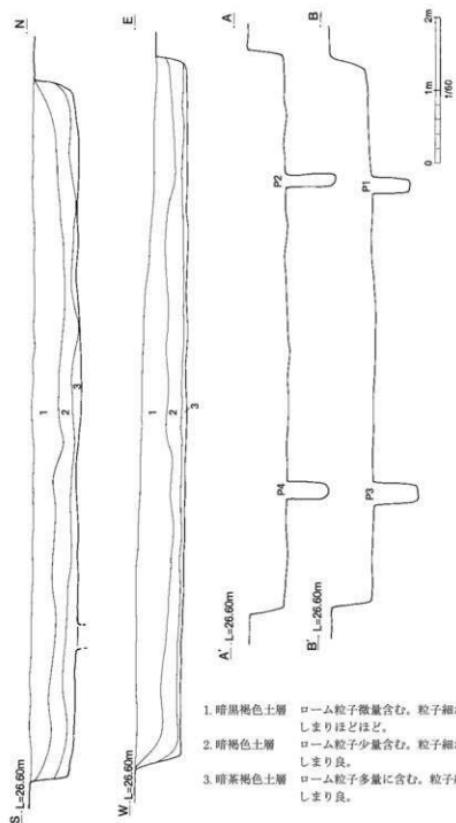
その他のピット：建物の床面には多くの小ピットが検出されているが、明確に用途が推定されるものは少ない。主柱穴以外14ヶ所検出されている。

P5(45cm×45cm×深さ20cm)、P6(23cm×21cm×深さ21cm)、P7(25cm×21cm×深さ22cm)は西隅側で検出される。用途不明。P8(27cm×25cm×深さ16cm)は南東壁中央付近で検出された。小さなピットであるが、位置的には出入り口ピットと想定される。P9(24cm×22cm×深さ17cm)、P10(27cm×26cm×深さ10cm)、P11(22cm×19cm×深さ23cm)は主柱穴の内側の南東よりに検出される。用途は不明。P12(31cm×26cm×深さ29cm)、P13(31cm×23cm×深さ32cm)、P14(35cm×22cm×深さ20cm)、P15(26cm×24cm×深さ25cm)、P16(26cm×24cm×深さ25cm)、P17(30cm×27cm×深さ24cm)、P18(21cm×21cm×深さ22cm)は北隅から北東壁側で検出される。用途不明。

カマド：北西壁の中央に付設される。カマドの平面規模は幅110cm、奥行131cmである。火床部の掘り込みは幅60cm、奥行81cmで深さ10cmあり、壁ラインより内側の床面上に設けられている。カマドを設置する時に掘り込まれたピットの幅は、断面図(a-a')上から判断して100cm程度あるが、両側の袖を内側に構築することにより区切って、内側を火床としている。また、火床の煙道直下に小ピット(幅30cm×奥行40cm×深さ15cm)を掘り込む。煙道は壁面を緩やかな三角形状(幅130cm×奥行34cm)に削る。煙道の断面形状は



第33図 8号住居跡カマド



第34図 8号住居跡土層・エレベーション

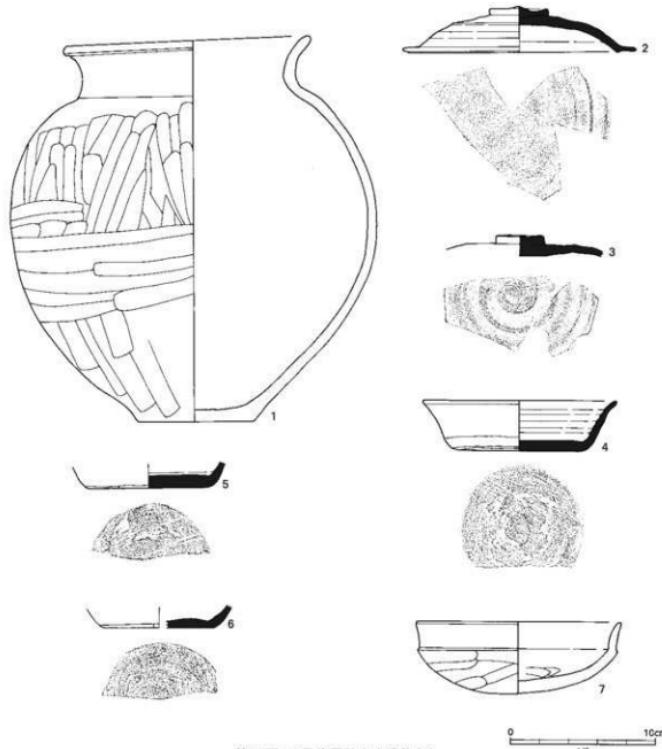
煙道直下の小ピットから急傾斜に立ち上げている。袖部は煙道部の壁面から90cm～99cmほど残存し、火床部の掘り込みを抱えるように“ハ”の字状に開く。天井部は残存せず、内部への落ち込みも確認できない。焚口部の形状も定かではない。袖部はロームで土台を築き、上部を山砂と粘土で構築する。火床部の手前には焼土(第④層)の堆積が確認される。

周溝：検出されず。

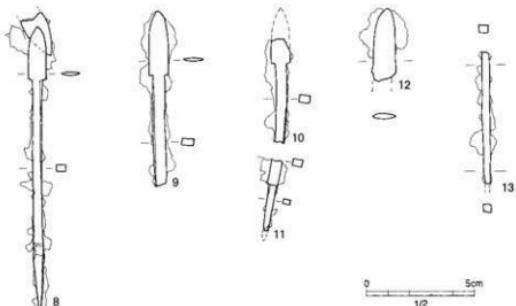
出土遺物

造構の覆土中から出土した遺物は総数673点であった。造構内から出土した遺物の総量としては、他の住居跡に比較して最も多い。内訳は土師器が大半を占め589点で、器種は甕類426点、同小片160点、ほか壺類3点であった。須恵器は50点出土しており、器種は甕類10点、壺類31点、同小片5点、蓋類9点であった。鉄器は6点出土している。繩文土器は23点あり、早期(条痕文系)1点、前期(浮島)に該当するもの2点、中期(加曾利E)5点、後晩期1点、時期不明5点、円盤型土製品4点が確認されている。そのほかに軽石1点、礫4点、不明1点が出土している。

その他に炭化材が出土していた。住居跡北隅の一帯、南隅の一部にややまとまる傾向がみられるが、多くはない。また、覆土中には炭化材の混入は確認されていない。



第35図 8号住居跡出土遺物(1)



第36図 8号住居跡出土遺物(2)鉄器

第10表 8号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	計測値 (cm)	遺存度	成形・形状・特徴		色調	胎土・焼成	備考
				内面	外側			
1	土鋸器 突	口径 底径 高さ	17.1 8.0 26.6	90%程度	側部外表面全体を縦にへら削りし後、底部の中央位に横に削り。側部内面はへらナダ。口縁部内外に横ナダ。	内面 外側 2.5VH/8	石英・長石 小砂粒 多 焼成 良好	VSBH1, 2, 3, 4, 5, 6, 8, 9, 11, 12, 13, 14, 16, 18, 20, 21, 24, 42, 81, 82, 96 側部下牛外面に黒 変
2	須鋸器 蓋	径 つまみ径 高さ	(16.0) 4.0 3.2	40%程度	ロクロ成形	内面 底 7.5V4/1~6/1	石英等 細砂粒 まばら 焼成 良好	VSBH21, 33, 64 内側に「×」線刻
3	須鋸器 蓋	口径 つまみ径 高さ	3.3 1.3 1.4	30%程度	ロクロ成形	内面 底 7.5V6/1	石英等 細砂粒 少 焼成 良好	VSBH48, 50
4	須鋸器 环	口径 底径 高さ	(13.4) 8.9 3.4	60%程度	ロクロ成形。切り離し後、底面をへら削り。体部外表面黄灰。	外表面 底 2.5V5/1 内面 底 2.5V7/2	石英等 細砂粒 少 焼成 良好	VSBH61
5	須鋸器 环	口径 底径 高さ	(8.3) [1.5]	25%程度	ロクロ成形。回転余地あり離し後、底面をへら削り。体部下端へら削り。	内面 底白 5V7/1	細砂粒 少 焼成 良好	VSBH
6	須鋸器 环	口径 底径 高さ	(7.6) [1.6]	25%程度	ロクロ成形。回転余地あり離し後、底面の外周を軸へら削り。体部下端へら削り。	内面 底 7.5V5/1	石英等 細砂粒 やや多 焼成 良好	VSBH
7	土鋸器 环	口径 底径 高さ	14.2 4.9 4.9	100%	体部外表面へら削り、内面へらナダ。口縁部内面横ナダ。底部丸底。	外表面 にぶい黄 10V6/1 内面 赤褐 5V8/4/6	石英・長石 細砂粒 多 焼成 良好	VSBH79 外側に黒変
8	鉄製品 鉄鎌	長さ 幅	13.1 0.8	ほぼ100%	組合系。側身形長刀頭。頭面不明瞭。头部は棒状でなく、先端に纏ぐる形である。頭部は円形でなく、ほぼ正方形。纏身の先端に側倒体の側身形長頭の纏身部（底存長2.0cm）が鏡面により付着。	頭部 底 1.5cm 底 0.5cm	頭部 底 0.15cm 底 0.15cm	VSBH
9	鉄製品 鉄鎌	長さ 幅	[8.1] 0.9	60%程度	組合系。側身形長頭。頭面不明瞭。头部は棒状でなく、先端に纏ぐる形である。頭部は円形でなく、ほぼ正方形。纏身長2.9cm、幅0.9cm。断面丸角造り、厚さ0.15cm。纏身間は角型。頭部は棒状。断面や長方形。(0.3cm×0.55cm)、長さ3.2cm。	頭部 底 2.9cm 底 0.9cm	頭部 底 0.15cm	VSBH
10	鉄製品 鉄鎌	長さ 幅	[4.7] 0.9	40%程度	組合式。側身形長頭。先端を火薙した纏身部分から頭部の一筋で残る。頭部以下欠損。纏身長1.1cm残存。頭部は棒状。断面やや長方形。(0.3m×0.5cm)、長さ3.6cm残存。	頭部 底 1.1cm 底 0.9cm	頭部 底 0.3m×0.5cm	VSBH
11	鉄製品 鉄鎌	長さ 幅	[3.3] 0.5	20%程度	組合式。側身形長頭。頭部の下半、頭面から底部まで残存。底部は欠損。頭部は棒状。断面やや長方形。(0.3m×0.45cm)、長さ1.1cm残存。底部長2.2cm残存。頭部は外側。	頭部 底 2.2cm 底 0.45cm	頭部 底 0.3m×0.45cm	VSBH
12	鉄製品 鉄鎌	長さ 幅	[3.3] 0.6	20%程度	組合式。側身形長頭。纏身部分。頭部2.3cm残存。幅1.2cm。断面丸角造り、厚さ0.25cm。纏身間は不明。頭部以下欠損。	頭部 底 2.3cm 底 1.2cm	頭部 底 0.25cm	VSBH76
13	鉄製品 鉄鎌	長さ 幅	[6.0] 0.3	20%程度	無形状。	頭部 底 6.0cm 底 0.3cm	頭部 底 6.0cm	VSBH75

11号住居跡（第37、38図・第11表・図版9）

位置 M9.10・N9グリッド

規模（南北軸×東西軸×深さ）推定3.4m×推定3.3m×0.23m

平面形状（推定）台形状か

南北軸方位 W76N

覆土土層 土層図から自然埋没が想定されるが、土層説明がなく正確な状況は不明。

住居跡の構造

東隅一帯が道路造成のため削平される。残存率約70%程度か。

主柱穴：検出されず。

その他のピット：焼土の下に、ピット(60cm×53cm×深さ15cm)の表示がみられるが、ロームが焼上化された範囲の可能性もある。

燃焼部：炉の痕跡が住居跡中央よりも西壁側に検出されている。60cm×50cmの範囲であった。明確に炉としていいか不明である。その他、住居跡の検出された範囲ではその他の痕跡はない。

周溝：検出されない。

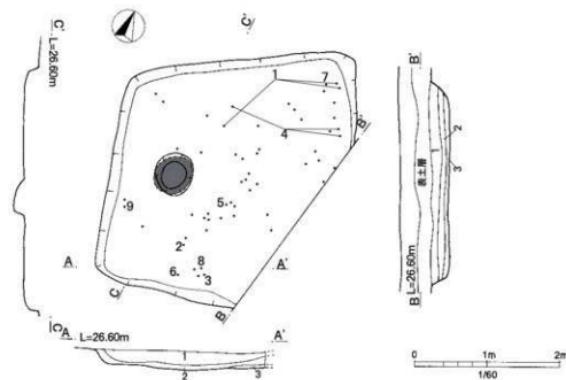
出土遺物

遺構の覆土中から出土した遺物は総数304点であった。不整な形状の住居跡としては遺物量が多い。内訳は土師器が大半を占め279点であった。器種は甕類が243点、壺類が36点であった。須恵器は少なく、6点出土しており、器種では甕類4点、壺類2点であった。灰釉陶器16点、鉄器1点、そのほかに礫2点が出土している。

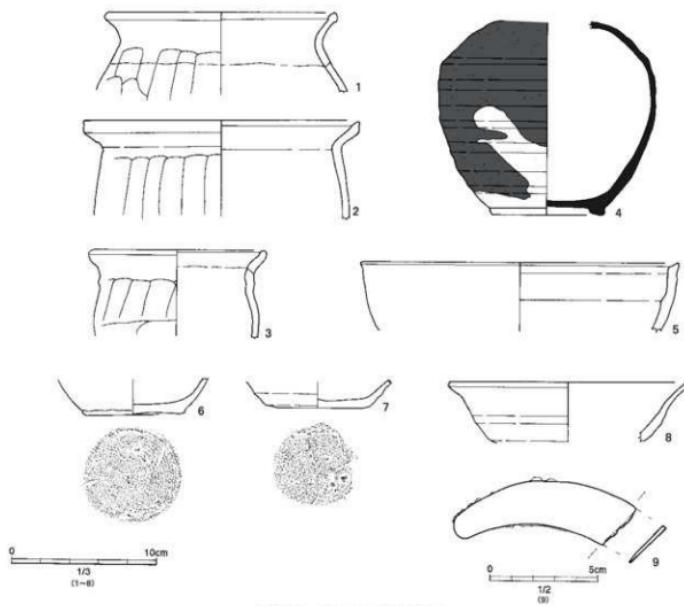
第11表 11号住居跡出土遺物観察表

〔 〕は現存または計測できた計測値。（ ）は復元推定値

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	成型・形状・特徴		色調	加工・焼成	備考
				外面	内面			
1	土師器 甕	口径 底径 高さ [5.0]	16.0 10%程度	側部外縁は上位に縦割のヘラ削り。 側部内面はヘラザゲ、口縁部内外に横ナデ。	石英・長石 5186/7 5186/3 内面 尾	5186/3 7.5184/3	石英・長石 細砂粒 やや多 焼成 良好	YS11H15、40、41
2	土師器 甕	口径 底径 高さ [6.7]	(0.9) - 10%程度	側部外縁は上位に縦割のヘラ削り。 側部内面に横ナデ。	外面 内面 尾	7.5184/3 7.5184/3	石英・長石 細砂粒 やや多 焼成 良好	YS11H2 内外面に黒変
3	土師器 甕	口径 底径 高さ [6.0]	(12.4) 10%程度	側部外縁は上手横捨のヘラ削り、中位で横捨のヘラ削り、側部内面に横ナデのヘラナダ。口縁内外面に横ナデ。	外面 内面 尾	5185/6 5187/2 5187/2	石英・長石 細砂粒 やや多 焼成 良好	YS11H55
4	灰釉陶器 瓶	口径 底径 高さ [13.4]	- 35%程度	高台付瓶 側部クロコ形、回転ヘラ削り後高台 側部外縁上半から一部下半にかけて灰釉。 底部の内側にも円形に灰釉がかかる。	外面 内面 尾	灰白 87/ 87/ 87/	石英・長石 細砂粒 多 焼成 良好	YS11H06、37、 48、 L12 グリッド
5	土師器 甕	口径 底径 高さ [4.7]	(22.0) 10%程度	横ナデ	外面 内面 尾	5188/6 2.5184/6 2.5184/6	長石細砂粒 やや多 焼成 良好	YS11H58
6	土師器 甕	口径 底径 高さ [2.5]	6.7 35%程度	クロコ形 底面回転し離しのまま。	外面 内面 尾	5185/6 5185/1～4/ 5185/1	石英・長石 細砂粒 やや多 焼成 良好	YS11H57
7	土師器 甕	口径 底径 高さ [1.8]	— 35%程度	クロコ形 回転充切後、外周ヘラ削り、体部下端ヘラ削り。	外面 内面 尾	2.5186/6～5/ 7.5187/6	石英・長石 細砂粒 多 焼成 良好	YS11H24 外面上黒変多い
8	土師器 甕	口径 底径 高さ [4.0]	(16.6) 20%程度	ロクロ形	外面 内面 尾	5184/1 5184/1 5183/1	石英・長石 細砂粒 多 焼成 良好	YS11H53
9	鉄器 斧	全長 重量 [3.5]	50%程度 か	鍛の先端部				YS11H43



第37図 11号住居跡



第38図 11号住居跡出土遺物

12号住居跡 (第39、40、41図・第12表・図版10)

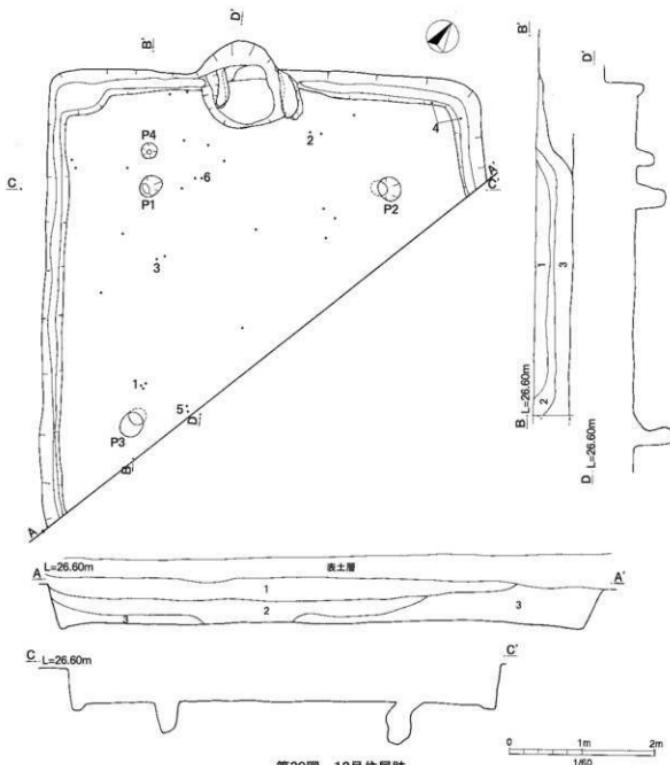
位置 M10, 11グリッド 横幅 (北西壁×南西壁×深さ) 5.90m × 推定6.3m × 0.50m

平面形状 (推定) 方形 中心軸方位 W56N

覆土土層 土層図から自然埋没と想定されるが、土層説明がないため、正確な状況は不明。

住居跡の構造 南隅から北隅付近まで道路造成のため削平される。残存率約50%程度か。

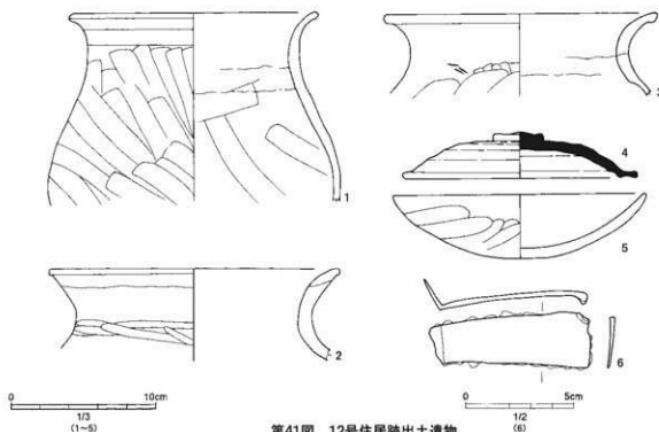
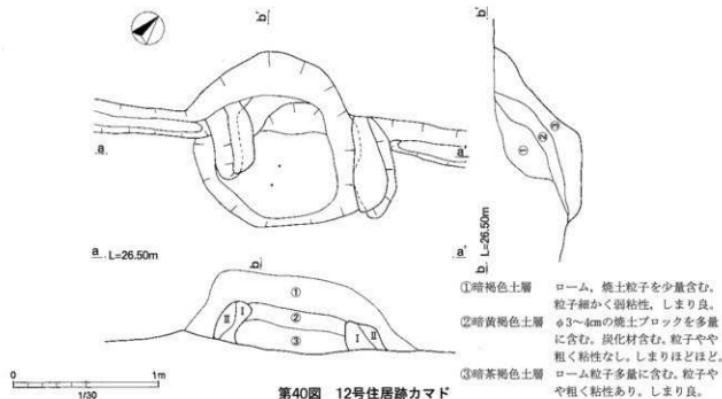
主柱穴: 4本柱の内3本検出。P1(35cm×27cm×深さ40cm), P2(34cm×32cm×深さ60cm), P3(35cm×30cm×深さ55cm)。主柱穴は3本とも40cm以上の深い掘り込みがみられる。東側の柱穴は削平のため欠失。これらの主柱穴の配置は南西壁方向(P1-P3間)3.12m, 北西壁方向(P1-P2間)3.20mで、縦横比率(南西壁方向/北西壁方向)0.975で、ほぼ方形状に配置される。住居跡の平面形状の縦横比率(南西壁/北西壁)が0.922とほぼ同じ比率となっている。



第39図 12号住居跡

カマド：北西壁の中央からやや西にずらして付設される。カマドの平面規模は幅138cm、奥行121cmである。火床部の掘り込みは幅115cm、奥行90cmのほぼ円形形状を呈し、深さ約10cm、壁ラインから床面にかけて設ける。煙道は壁面を幅115cm、奥行43cmの緩やかな半円形状に掘り込む。煙道の断面は比較的緩やかな傾斜で立ち上げている。袖部は壁から火床部の掘り込みを囲むように約50cm～70cmほど残存する。天井部や焚口部の構造は残存しない。カマド内部にも天井部の崩落した痕跡はみられない。

周溝：住居跡が残存する範囲でカマド以外全周する。幅が19cm～25cm、深さは6cm～9cmである。



第41図 12号住居跡出土遺物

出土遺物

造構覆土中から出土した遺物は総数314点であった。内訳は土師器が大半を占め281点であった。器種は甕類274点、壺類7点であった。須恵器は21点出土しており、器種では壺、甕類7点、壺類8点、蓋類6点であった。鉄器1点、陶器1点、そのほかに砥石1点、不明9点が出土している。

第12表 12号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	計測値 (cm)	遺存度	成形・形状・特徴	色調	〔 〕は現存または計測できた計測値、() は復元推定値	
						胎土・焼成	備考
1	土師器 甕	口径 底径 高さ (17.2) (20.0) (13.0)	20%程度	脚部外表面部～脚部上半は縦位・斜位のへラ削り。 脚部内外部に横ナデ。口縁部内外に横ナデ。	外面 にい・赤瓦 5185/6 内面 縦灰 5185/6	石英・長石 細砂粒 多 焼成 良好	YS1208
2	土師器 甕	口径 底径 高さ (28.0) (5.5)	10%程度	脚部外表面ミガキ、内面ペラナデ。 口縁部内外に横ナデ。	外面 褐 2.5187/6 内面 淡赤褐色 2.5187/6	石英・長石 細砂粒 多 焼成 良好	YS12024
3	土師器 甕	口径 底径 高さ (18.9) (—) (5.5)	10%程度	脚部外表面はへラ削り、口縁外表面に横ナデ。 脚部内面を成形し、薄手。	外面 明赤褐色 5185/6 内面 赤瓦 1086/6	石英・長石 細砂粒 多 焼成 良好	YS1206
4	須恵器 蓋	口径 底径 高さ (36.1) (—) (3.2)	80%程度	クロコ彫刻、つまみ側面2段で回転へラ削り。	外面 にい・赤瓦 1086/6 内面 赤褐色 5184/6	長石 細砂粒～6/2 多 焼成片 多	YS1207, 30, 31
5	土師器 壺	口径 底径 高さ (17.5) (—) (4.4)	100%	口縁外表面 横ナデ、全体外表面へラ削り。 全体内面ミガキ。内底、赤瓦	外面 明赤褐色 5185/6 内面 黑 51.5/6	石英・長石 大砂粒～ 細砂粒 多 焼成 やや良	YS1209 全体外表面に黒変
6	鉄製品 鉗	長さ (7.5)	50%程度 か。	鍛の粗元部分			YS120

13号住居跡 (第42, 43, 44図・第13表・図版10)

位置 L10, 11・M10, 11グリッド 規模 (北東壁×南東壁×深さ) 4.50m×[2.15m]×0.23m

平面形状 (推定) 方形

中心軸方位 W60N

覆土土層 不明

住居跡の構造 北西壁カマド脇から南東壁中央付近までの西側半分が道路のため未調査。調査率約50%

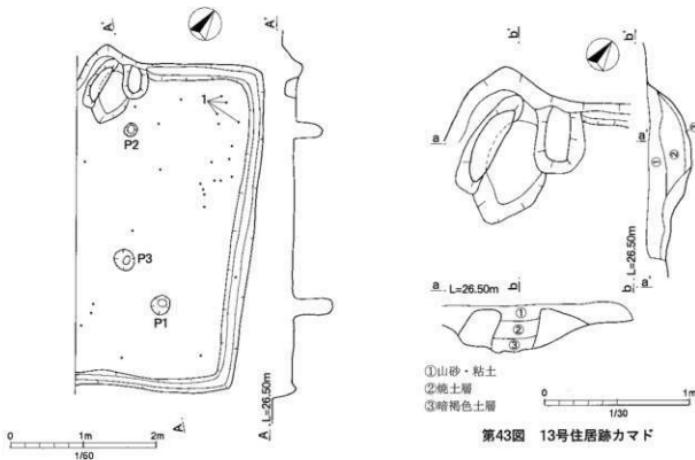
主柱穴：想定される4本柱の内1本検出。P1(28cm×28cm×深さ55cm)は東隅側に位置する。この住居跡が想定する4本柱であれば、カマド東側の住居北隅付近にも柱穴が想定されるが、調査では検出されていない。P2(20cm×18cm×深さ38cm)はカマド東側に近接して検出されているが、相対的な位置関係から柱穴とは考えにくい。P3(30cm×26cm×深さ不明)は用途不明。

カマド：北西壁の中央付近に付設。カマドの平面規模は幅85cm、奥行108cmである。火床部の掘り込みは幅60cm、奥行86cmで、深さ約14cmあり、壁ラインから住居床面にかけて設ける。未調査の部分にかかるため正確ではないが、煙道は壁面を幅約100cm、奥行38cmの緩やかな三角形状に掘り込み、煙道の断面は緩やかに弧を描いて立ち上がる。袖部はカマド崩壊時点で動いている可能性もあるが、右袖部は壁から火床部の掘り込みを囲むように45cmほど残存する。左袖部もしくは天井構造物の残存は掘り込みに掛って検出されている。天井部や焚口部の構造は残存しない。カマドを覆う①層に粘土が混入されているようだが詳細は不明。

周溝：住居跡が残存する範囲でカマド以外全周する。幅は約16cm、深さ7cmほどである。

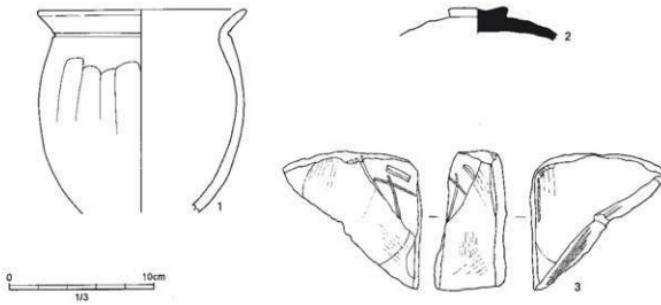
出土遺物

造構覆土中から出土した遺物は総数100点であった。内訳は土師器が大半を占め94点であった。器種は甕類のみであった。須恵器は5点出土しており、器種では甕類4点、蓋1点であった。他に砥石1点が出土している。



第42図 13号住居跡

第43図 13号住居跡カマド



第44図 13号住居跡出土遺物

第13表 13号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	計測値 (cm)	遺存度	成形・形状・特徴	色調	胎土・焼成	備考
1	土器器 実	口径 底径 高さ [14.0] [14.0]	25%程度	部分外面は縦板のペラ削り、頭部に工具で抜いた凹部は削らす。剥離内面はヘラ削り。口縁部内外に横ナブ。	外面 淡黄褐色 内部 2.5186/4 2.5186/1 内面 灰黄 2.517/2	石類・長石・細砂粒 や少 15. カ	VS13H11, 13, 14,
2	須直器 蓋	— — 高さ [1.9]	25%程度	ロクロ成形。つまみ側を2~3段で回転ペラ削り。	外面 灰 5186/1 内面 灰オリーブ 5186/2	長石・細砂粒 少 青母片 焼成 良好	VS13H3
3	石器 砥石	大きさ 厚さ 9.7×8.8 4.9	50%程度 か	断面以外に擦った痕跡。各面に溝状の擦痕。			VS13H

14号住居跡 (第45, 46, 47図・第14表・図版11)

位置 K9, 10グリッド

規模 (中心軸×横軸×深さ) 3.72m×3.80m×0~0.31m

平面形状 略方形

中心軸方位 W61N

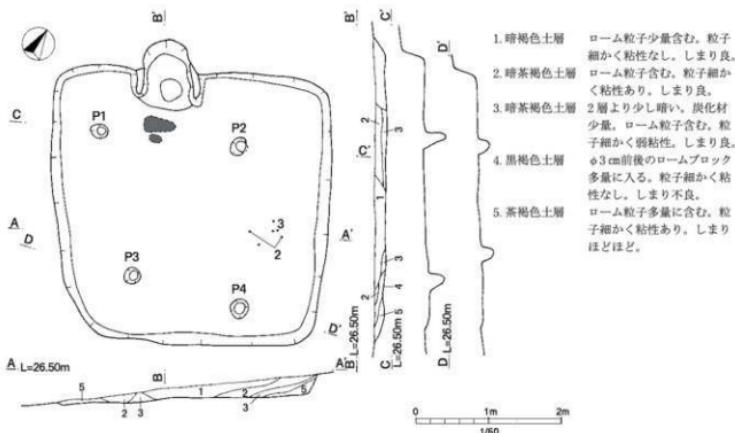
覆土土層 自然埋没

住居跡の構造 住居跡は南西側に傾斜する場所に立地。そのため、北側半分の壁ラインは比較的明瞭であるが、南側半分の壁は不明瞭。

主柱穴：4本柱を推定。P1(25cm×19cm×深さ21cm), P2(25cm×20cm×深さ32cm), P3(22cm×20cm×深さ17cm), P4(27cm×24cm×深さ16cm)。それぞれの柱穴は16~32cmの掘り込みがみられるが、全体的に浅い。P3の位置が多少不自然である。これらの主柱穴は中心軸方向(P2-P4)2.20m, 横軸方向(P1-P2)1.95mで、縦横比率(中心軸方向/横軸方向)1.128で、カマドに対してやや縱長の長方形状に配置される。住居跡の平面形状が、北西壁3.80m, 北東壁3.60mを基準にすると、縦横比率(北西壁/北東壁)1.056と縦長の形状となり、柱穴の配置想定と類似する形状であった。

カマド：北西壁の中央、やや西寄りに付設。カマドの平面規模は幅102cm、奥行97cmである。火床部の掘り込みは幅61cm、奥行77cmで、ほぼ円形を呈し、深さ7cm、壁ライン上に設ける。煙道は壁面を幅75cm、奥行43cmの半楕円形状に掘り込み、断面をゆるい傾斜で立ち上げる。残存する袖部は壁から37cm~45cmほど残存する。天井部は残存せず、内部への落ち込みも確認できなかった。また、焚口部の形状も定かではない。袖部はロームで土台を築き、その上に山砂と粘土で構築する。

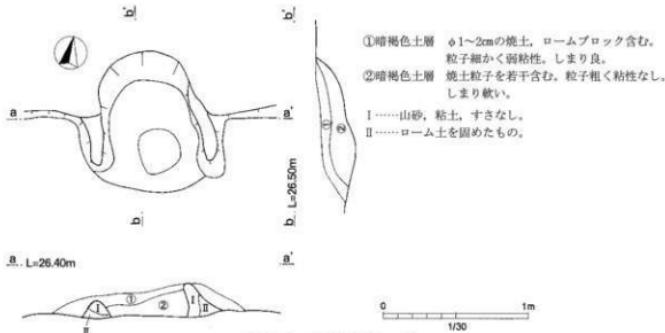
周溝：未検出



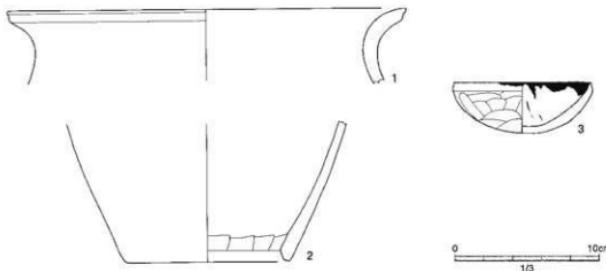
第45図 14号住居跡

出土遺物

造構覆土中から出土した遺物は総数94点であった。内訳は土師器がほとんどを占め93点であった。器種は甕類90点、壺類3点であった。そのほか敲き石1点が出土する。



第46図 14号住居跡カマド



第47図 14号住居跡出土遺物

第14表 14号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	計画値(cm)	遺存度	成形・焼形・特徴	色調	備考	
						石英・長石 細砂粒 やや多	石英・長石 細砂粒 多
1	土師器 甕	口径 底径 高さ 〔27.5〕 〔5.0〕	10%以下	口縁部内外に横ナギ。 口縁部内外に横ナギ。	外面 灰青～黄灰 2.57/2～2.515/1 内面 黄灰 2.515/1	石英・長石 細砂粒 やや多 適度 多 燒成 良好	TS1407
2	土師器 壺	口径 底径 高さ 〔11.2〕 〔9.5〕	10%程度		外面 灰青褐色 10/15/2 内面 黃褐色 7.518/6	石英・長石 細砂粒 多 燒成細片 多 燒成 良好	TS1402, 4, 7
3	土師器 甕	口径 底径 高さ 9.4 — 3.4	85%程度	丸底甕ではあるが、底部の安定度はいい。 口縁内外面に横ナギ。体部内側へラナギ。外側へ 少削り。丸底	外面 に右い壁～反面 7.518/7～7.518/6 内面 に左い壁 7.518/4	石英・長石 細砂粒 やや多 燒成 良好	TS1406, TS1507 口縁内外にスス付 壁明瞭か

第2節 土坑

土坑は本調査区域内から1基検出されている。

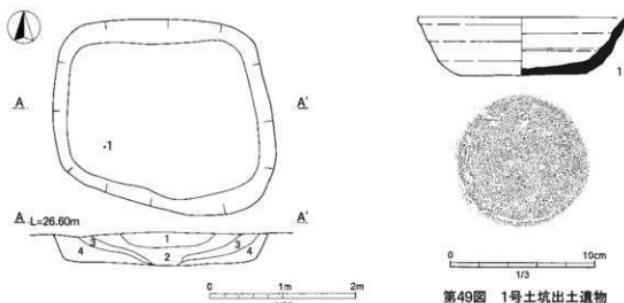
1号土坑 (第48、49図・第15表・図版11)

位置 L4グリッド 横幅(径)×(径)×(深さ) 3.63m × 3.02m × 約0.4m

平面形状 四方に丸みをもつ不整形

覆土土層 自然埋没 内部構造 燃焼部などは検出されていない。

遺物出土状況 本土坑から出土した遺物は3点であった。いずれも実測図を掲載した須恵器の破片3点のみであった。



第49図 1号土坑出土遺物

1. 黒褐色土層 少量のローム粒子を含む。粒子細かく弱粘性。しまりほどほど。
2. 單褐色土層 ローム粒子を含む。粒子細かく粘性をもつ。しまり良。
3. 單褐色土層 2層より少し黒っぽく、ローム粒子少量含む。粒子細かく弱粘性。しまり良。
4. 茶褐色土層 ローム粒子を多量に含む。粒子細かく粘性あり。しまり良。

第48図 1号土坑

第15表 1号土坑出土遺物観察表

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	成形・焼形・特徴		色調	胎土・焼成	備考
				外側	内側			
1	須恵器 环	口径 (14.5) 底径 8.8 高さ 4.0	80%程度	ロクロ成形		外面 黒白 内面 黒白	SIT/1 SIT/2 焼成 良好	少 YSI 土坑 1

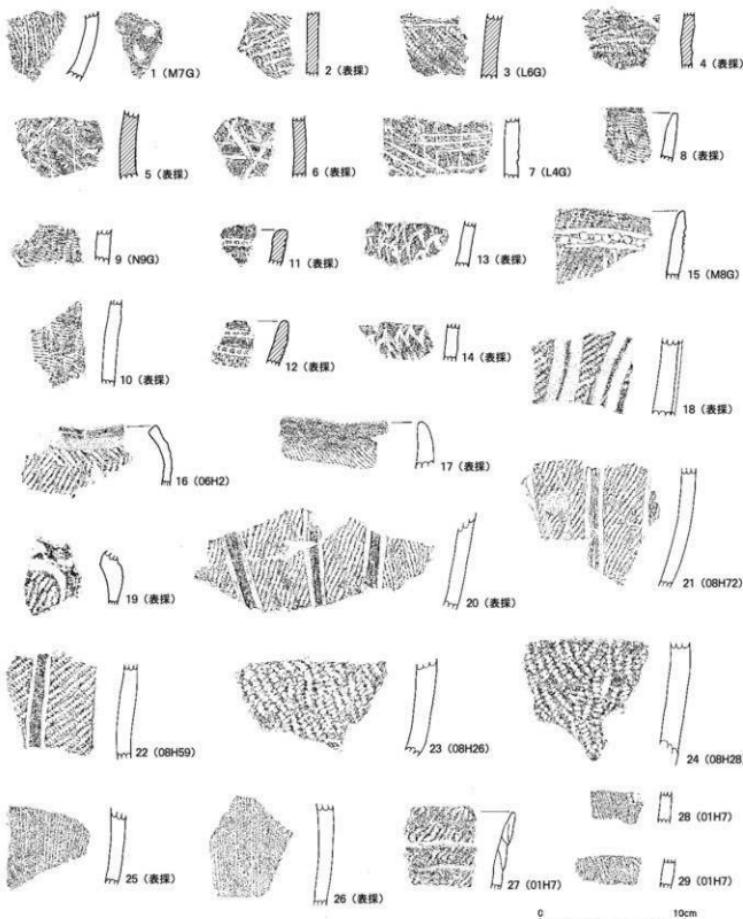
第3節 その他の出土遺物

住居跡等の遺構以外から出土した遺物は、総数366点確認された。遺物の概要是、土師器173点、須恵器22点、石器片2点、縄文土器154点、陶磁器4点、錢貨2点、石塊など不明なもの9点であった。

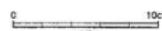
縄文土器 (第50図、図版12)

境作遺跡から出土した縄文土器は、総数188点であった。その内、34点は住居跡から出土し、残り154点は、住居跡以外のグリッド出土遺物であったが、その内129点の遺物に出土地点の注記がされていなかつた。おそらく、表土撤去後の表面採集遺物であったと思われるが、そのため、出土位置及び出土傾向をつ

かむことはできなかった。唯一出土地点を特定できる例として、8号住居跡から縄文時代の各時期にわたって23点の縄文土器が出土している。同一地点からの出土量としては比較的多く、出土傾向の一端を示しているのかもしれない。

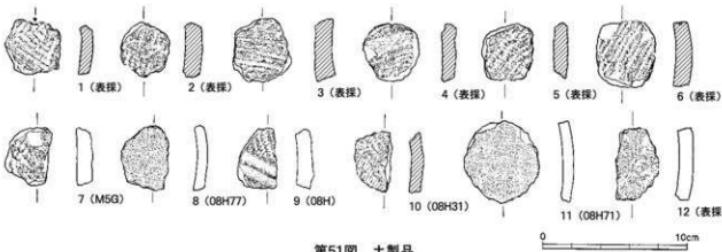


第50図 縄文土器



1(橙5YR7/6石英・長石多)は縄文時代早期、条痕文系の土器の底部付近。2(にぶい橙7.5YR7/4石英・長石多、織維多)、3(褐灰7.5YR4/1石英・長石合、織維多)、4(褐灰7.5YR4/1石英・長石合、織維多)は縄文時代前期、縄文を施す。5(にぶい赤褐色SYR4/4石英・長石合、織維多)、6(橙SYR6/6石英・長石合、織維合)、7(にぶい黄褐色10YR7/4石英・長石多)は前期、一部に縄文がみられるが、荒い網目状の沈線。8(にぶい黄褐色10YR5/3石英・長石多)、9(8と同)、10(8と同)は前期、貝殻压痕文が施す。11(にぶい黄褐色10YR7/3石英・長石多)、12(11と同)には半裁竹管の押し引きによる施文がみられる。13(橙SYR6/6石英・長石多)、14(灰褐色SYR6/2石英・長石多)は貝殻压痕文、浮島期。15(赤褐色10YR4/4石英・長石少)は平行沈線の中に円形の刺突、中期初頭か。16(にぶい赤褐色2.5YR5/3石英・長石少)、17(淡黄2.5YR8/3石英・長石やや多)、18(淡黄2.5YR8/3石英・長石少)、19(にぶい褐色SYR6/4石英・長石少)、20(明赤褐色2.5YR5/6石英・長石やや多)、21(20と同)、22(20と同)まで縄文中期後半、加曾利E期の土器。23(淡黄7.5YR7/3石英・長石多)、24(23と同)は荒い縄文が施文され、同様に中期後半。25(にぶい黄褐色10YR6/3石英・長石多)、26(25と同)は縦方向の条線文。27(浅黄褐色10YR8/4石英・長石多)は輪積み底を残し、荒く縄文を施す。28(にぶい赤褐色2.5YR4/4石英・長石多)、29(浅黄褐色7.5YR8/4石英・長石多)は細かい条線が施文される。

*本文中の遺物ナンバーの後の()書きの前段には土器の色調を「新版 標準土色帖 1992年版」(農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修)を参考にした土色名とMunsell表示を併記し、後段に、胎土に含まれる鉱物等の含有物を記した。



土製品 (第51図、図版13)

第51図 土製品

13点の土製品が確認された。1(表様、胎土に織維、羽状縄文)は不整形であるが、端部にわざかな抉りがみられた。2(表様、胎土に織維、縄文)、3(表様、胎土に織維、付加状縄文)、4(表様、胎土に織維、縄文)は円形、5(表様、胎土に織維、縄文)は不整形または方形。6(表様、胎土に織維、縄文)は方形に近い形状、7(M5グリッド、縄文)、8(08Hカ7、無文)、9(08H、沈線と縄文)、10(08H31、胎土に織維、貝殻压痕)、11(08Hカ1、無文)、12(胎土に織維、無文)まで円形。11、12はやや大きく、6cm大の大きさである。そのほかは4cmから5cmほどの小型のものである。

その他のグリッド出土遺物 (第52図、第16、17、18表、図版13、14)

調査区域の2地点から、小規模な貝ブロックが検出されている(図版13)。時期を特定することができる出土物がないため、時期は定かではないが、一覧表(第16~18表)で詳細を記載する。

M8グリッドの南東隅で検出された貝ブロックは、ハマグリのみの1種類で構成されていた。その中でも11個体の左右殻が一致し、対となった。また、表以外にもハマグリの破片が20から30片ある。

N7グリッドの中央北側から検出された貝ブロックは、ハマグリ、アサリ、シオフキ3種類で構成されている。それぞれ個体数は少ないが、表以外にもシオフキガイの破片が30から40片含まれていた。

遺構外出土の土師器は173点で甕・壺類が152点、杯・蓋類が21点であった。住居跡出土の土師器には、蓋形土器は確認されていないが、M3グリッドから1点出土している。(第52図1、第18表1、図版14)。遺構外出土の須恵器は22点で、甕・壺類が13点、杯類が9点出土している。また、陶器は、4点が出土している。陶器の高台付皿(第52図2、第18表2、図版14)はM2グリッドから出土する。石器は、2点の出土が確認されている。磨製石斧(第52図3、第18表3、図版14)はM5グリッドから出土する。銭貨の出土は2点(図版14)確認されている。鏡がひどく明らかではないが、鉄鏡とみられる。

第16表 M8グリッド貝ブロック

ハマグリ

(二枚貝網 Bivalvia, マルスダレガイ科 Veneridae, ハマグリ Meretrix lusoria)	
左殻	右殻
推定	実測
	殻長 8.6~9.0
	8.1~8.5
	7.6~8.0 1
	7.1~7.5 1
	6.6~7.0 2
1	6.1~6.5 2
3	5.6~6.0 1 2
4	5.1~5.5 3
4	4.6~5.0 1 2
1	4.1~4.5
	3.6~4.0
	3.1~3.5
1	2.6~3.0
9	9 8 9

第17表 N7グリッド貝ブロック

ハマグリ

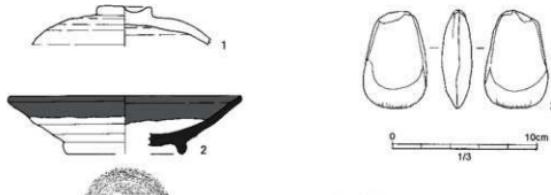
(二枚貝網 Bivalvia, マルスダレガイ科 Veneridae, ハマグリ Meretrix lusoria)	
左殻	右殻
推定	実測
1	4.1~4.5
2	3.6~4.0
1	3.1~3.5
2	0 1 1

アサリ

(二枚貝網 Bivalvia, マルスダレガイ科 Veneridae, アサリ Ruditapes philippinarum)	
左殻	右殻
推定	実測
1	3.1~3.5 1 1
	2.6~3.0 1
1	0 2 1

シオフキガイ

(二枚貝網 Bivalvia, バカガイ科 Macrididae, シオフキガイ Macraea veneriformis)	
左殻	右殻
推定	実測
2	4.1~4.5
2	3.6~4.0 2
3	3.1~3.5 3 1
0	2.6~3.0 1
0	7 6 1



第52図 その他の遺物

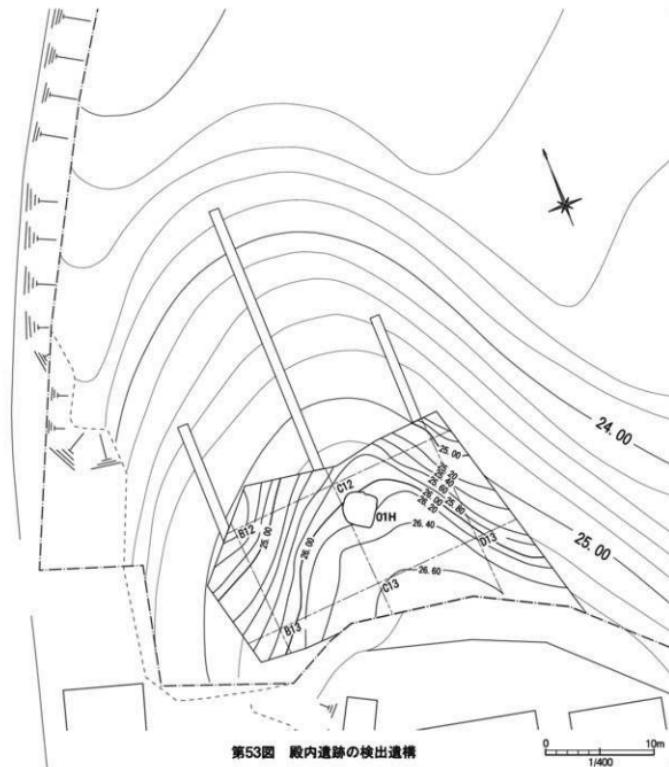
第18表 その他のグリッド出土遺物観察表

No.	器種	計測値 (cm)	遺存度	成形・形状・特徴		色調	胎土・焼成	備考
				外面	内面			
1	土師器 蓋	口径 底径 厚さ	— [2.6]	ロクロ成形、ヘラ削り2段	外面 赤粒 赤粒	1086/g 1086/g	石英・長石 小粒～細砂粒 多 焼成 良好	
2	陶器 高台付皿	口径 底径 高さ	(36.2) (3.0) 4.0	35%程度 ロクロ成形	外面 灰白 灰白	7,517/1 7,518/1	長石・粗砂粒 少 焼成 良好	口縁内外に釉 釉白518/2～7/2
3	石器 磨製石斧	長さ 幅 厚さ	6.8 4.3 2.0	ほぼ円形 両刃の磨製石斧	内面 灰白	7,517/1		

第三章 殿内遺跡

殿内遺跡の調査区域は、舌状台地の先端部にあたる。地形的には、北側に向かって傾斜する斜面上に立地する。殿内遺跡の本体は、後に調査が行われる本地点南側の台地平坦面にみられる。

今回の調査区域内からは、遺構1軒が検出されている。この遺構は、調査時において、堅穴住居跡と判断されている。また、本跡からの出土した遺物の総数は、住居跡とされた遺構から出土した79点のみであった。



第53図 殿内遺跡の検出遺構

第1節 壺穴住居跡

1号住居跡（第54、55図・第19表・図版14）

位置 C12グリッド 規模（長軸×短軸×深さ）3.06m×2.87m×0.22m

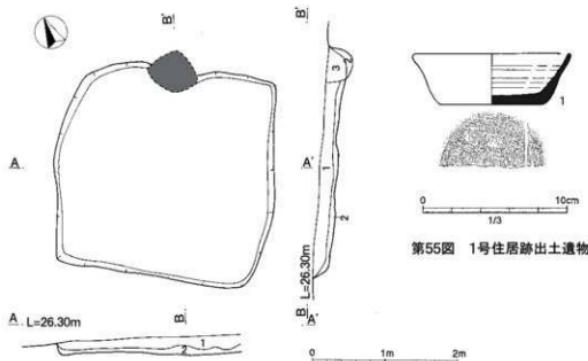
平面形状 囲にやや丸みをもつ略方形 長軸方位 W34N

覆土土層 自然埋没か

住居跡の構造 炉及び柱穴等未検出のため、遺構の構造も不明

遺物出土状況

本跡から出土した遺物の総数は79点を数えた。土師器の甕類66点、須恵器の壺類13点であった。



1. 暗褐色土層 ϕ 3~7cmのロームブロックを各所に含む。粒子細かく弱粘性。しまり不良。
2. 暗茶褐色土層 ローム粒子約1/2含む。粒子細かく粘性あり。しまりほどほど。
3. 塗土層

第54図 1号住居跡

第19表 殿内遺跡1号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	計測値 (cm)	遺存度	成形・焼形・特徴		色調	胎土・焼成	備考
				口径	底径			
1	須恵器 甕	(10.9) 7.0 3.3	40%程度	クロ成形。体部の立ち上がりが直線的に立ち、底面へラ削り。		内外面 灰 灰砂粒 まばら	石英・長石 灰砂粒 地成 灰砂	THH

第IV章 まとめ

今回報告する境作遺跡と殿内遺跡の調査が行われたのは、昭和60年9月から昭和61年1月にかけてであった。両遺跡の発掘調査として、初めての事例であった。調査の成果は、境作遺跡で13軒の竪穴住居跡と1基の土坑、殿内遺跡で1軒の竪穴式住居跡が検出された。また、両遺跡での出土遺物は、総数2,746点で、その内訳は、縄文土器が早期から後晩期まで188点、古墳時代から奈良・平安時代の土師器2,272点、須恵器206点、陶磁器26点、石器3点、鐵器8点、銭貨3点、その他不明なもの35点が出土している。また、境作遺跡の区域内から、時期は特定できなかったが、2ヶ所の貝ブロックが検出された。以下、それぞれの遺跡の概要をまとめる。

境作遺跡の概要

境作遺跡は東西200m、幅110mほどの小さな舌状台地に立地している。調査区域は台地の北西側に位置するが、台地の南東側を国道16号線と市の水道施設で大半が破壊されてしまっている。

この調査で検出された竪穴住居跡の時期は、竪穴住居跡1軒が古墳時代後期に、竪穴住居跡8軒が奈良時代とすることが、比較的蓋然性の高いものと判断された。また、他の4軒の竪穴住居跡については、時期を確定することが困難であったため、未定とした。

古墳時代後期の竪穴住居跡としては、4号住居跡が該当する。遺構内からの出土遺物の概要は第20表のとおり、土師器が全体の約94%を占めていた。須恵器はわずか3%ほどしかなかった。また、カマド内から完形の支脚または破片が検出されている。完形の支脚はカマド内で直立しているものもあり、また、完形の土師器の壺や壺なども残存しており、カマド廃棄時の状況を伺わせる。

第20表 古墳時代後期の住居跡の出土遺物

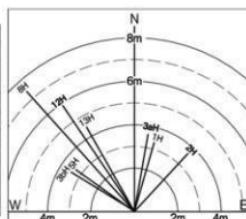
遺構	土師器			須恵器			支脚	石器	鐵器	他	計
	壺	壺類	他	壺	壺類	他					
4住	146	23	18	1	4	1	5	0	0	2	200

奈良時代とされる竪穴住居跡は、1号住居跡、2号住居跡、3a・b号住居跡、5号住居跡、8号住居跡、12号住居跡、13号住居跡が該当する。

出土遺物の概要は第21表のとおりである。出土状況としては、各住居跡で出土遺物の数量が50点台から670点台までと大きな開きがみられた。また、住居跡の出土遺物の状況では、土師器が87%から92%と出

第21表 奈良時代住居跡の出土遺物及び中心軸等方位・規模

遺構	土師器			須恵器			石器	鐵器	他	計
	壺	壺類	他	壺	壺類	他				
1住	23	3	0	21	13	0	0	0	4	64
2住	69	0	0	2	3	0	0	0	2	76
3a住	139	25	1	11	4	4	0	0	4	188
3b住	22	1	24	2	5	0	0	0	3	57
5住	194	0	0	12	1	0	0	0	3	210
8住	426	3	160	10	31	9	0	6	28	673
12住	274	7	0	7	8	6	0	1	11	314
13住	94	0	0	4	0	1	1	0	0	100
合 計	1,241	39	185	69	65	20	1	7	55	1,682





土遺物の大半を占める傾向がみられたが、1号住居跡のみ土師器の検出率が41%、須恵器の比率が53%という特異な傾向を示していた。

また、土器以外の遺物としては、8号住居跡と12号住居跡から鉄器が出土している。8号住居跡では鉄鎌が6点検出され、12号住居跡からは鉄鎌が出土している。この時期に該当すると他の住居跡からは、鉄器の出土はみられていない。

堅穴住居跡の中心軸の方位及び規模は、1号住居跡、2号住居跡、3a号住居跡の中心軸の方向が北北東から北東方向を示し、住居の規模が3m前後的小規模な住居跡であった。そのほかの5軒の住居跡、3b号住居跡、5号住居跡、8号住居跡、12号住居跡、13号住居跡の中心軸の方位は、おおむね北西方向を示し、規模としては、3mから8mと開きが大きい状況がみられた。

時期については、8号住居跡、12号住居跡、13号住居跡は古墳時代末から奈良時代初頭の時期とみられる。また、1号住居跡から在地産とみられる須恵器が出土しており、奈良時代後半に位置するかもしれない。そのほか、2号住居跡、3b号住居跡、5号住居跡は、時期を特定するための蓋然性はやや低いが、おおむねこの時期に該当するものとした。しかし、3a号住居跡は、さらに時代をさかのぼる可能性があると考えられた。

未定とした4軒の堅穴住居跡は、6号住居跡、7号住居跡、11号住居跡、14号住居跡である。6号住居跡は出土遺物がきわめて少なく、また、カマドが付設されないなど、時期を限定することが困難であった。7号住居跡も出土遺物の数量が少なく、時期の特定が難しい。11号住居跡は出土遺物の状況から、9世紀以降の時期が想定されたが、時期を特定するには至らなかった。覆土中から灰釉陶器が出土しているが、接合する破片が住居跡外のものも含まれ、流れ込みの可能性もある点や、調査された範囲内でカマドの付設が確認されていないことなど、明確な根拠がなく、時期未定とせざるを得なかった。14号住居跡は出土遺物が少ないため、十分な根拠はないが、古墳時代後期の範囲に入れることも可能かもしれない。しかし、現時点では未定とした。

そのほかの遺構として、1号土坑は、出土遺物が須恵器の破片3点のみであり、時期を特定する蓋然性は低いが、奈良時代の可能性もある。

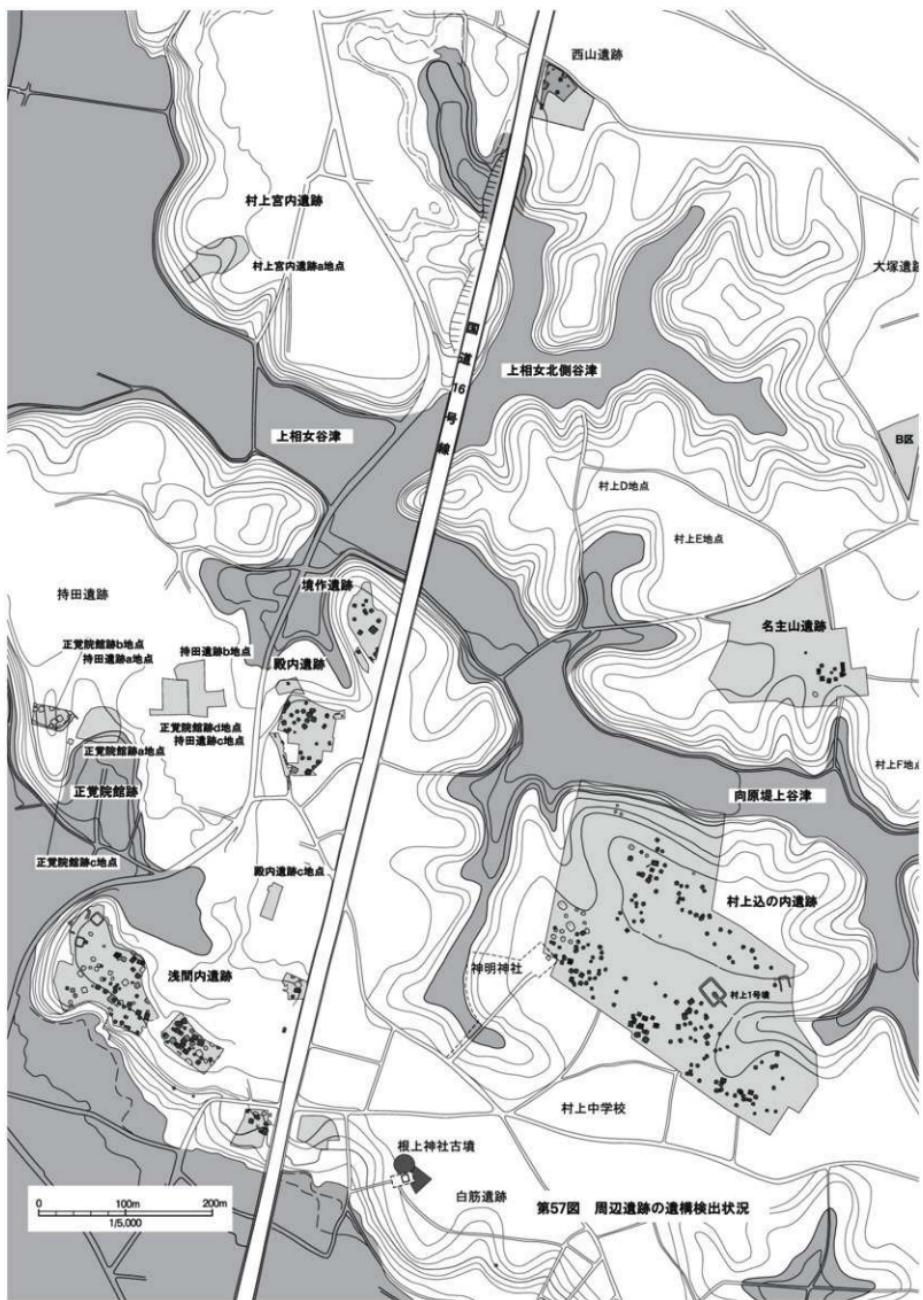
調査による出土遺物は、総数2,667点であった。その内訳は、縄文土器が早期から後晩期まで188点、古墳時代から奈良・平安時代の土師器2,206点、須恵器193点、陶磁器26点、石器3点、鉄器8点、銭貨3点、その他不明なもの35点であった。そのほか2ヶ所の貝ブロックからそれぞれ少量ではあるが、ハマグリ、アサリ、シオフキガイなどが検出されている。

出土する縄文土器の概要は、早期後半、条痕文系土器、前期黒浜期、前期後半、浮島系土器、中期初頭、中期中葉 加曾利E式土器が出土している。加曾利E式期の土器の割合が一番多く確認されている。出土傾向は、出土位置が特定できない遺物が多く、明確な傾向を示すことはできないが、8号住居跡の覆土中からの検出例が比較的多くみられた。そのほか、後晩期の粗製土器が出土している。

銭貨については、鉄製品であるが、鋳が激しく特定できなかった。

殿内遺跡の概要

殿内遺跡は境作遺跡の西側、浅い谷津を隔てて小さく突き出た舌状台地に立地する。この調査では、台地先端のわずかな部分のみが対象になっている。調査区域からは、遺構が1基検出されている。調査時、



第57図 周辺遺跡の発掘状況

堅穴住居跡と判断しているが、確定はむずかしい。また、遺構の時代も出土遺物が少なく、特定するには蓋然性は低いが、奈良時代の範囲に入るものとした。

出土遺物は総数79点で、すべて遺構内からの出土であったようだ。内訳は、奈良平安時代の土師器66点、須恵器13点が出土している。

殿内遺跡の調査状況は、南側に隣接するb地点の調査では、調査面積5,350m²に対して本調査が行われ、弥生時代の方形周溝墓1基、古墳時代前期前半の堅穴住居跡1軒、奈良時代の堅穴住居跡21軒、平安時代の堅穴住居跡13軒が検出されている。主に「7世紀末から8世紀前半の時期にピークが見られ」、10世紀まで断続的に営まれていると報告されている。

c地点では、確認調査が行われている。調査対象面積499.95m²で、確認された遺構は、奈良平安時代の堅穴住居跡7軒、同時代の掘立柱建物2棟であった。c地点はa・b地点から離れていることもあり、一連の集落のつづきであれば、本跡は遺構密度が高く、また、広範囲にわたる可能性もある。

周辺遺跡の概要

境作遺跡と殿内遺跡の調査で、奈良時代を中心とする時期に集落が営まれており、改めて、上相女谷津を中心とした各遺跡の奈良・平安時代の概要をみてみる。

村上込の内遺跡は、本跡と同じ上相女谷津を東側に500~600mほど遡った左岸の台地上に立地する。調査面積 約50,000m²の区域から、弥生時代の堅穴住居跡14軒、奈良平安時代の堅穴住居跡155軒、掘立柱建物跡24棟という大規模な遺跡であった。奈良時代前半に成立し、平安時代まで継続した遺跡である。

村上込の内遺跡の対岸に**名主山遺跡**がある。検出された遺構は、弥生時代後期の堅穴住居跡1軒、平安時代の堅穴住居跡6軒、同掘立柱建物6棟であった。

上相女谷津から北上する上相女北側谷津の奥に**西山遺跡**がある。この遺跡は、1,100m²を対象に本調査が行われ、古墳時代前期の堅穴住居跡3軒、平安時代の堅穴住居跡3軒が調査されている。

浅間内遺跡は、本跡の南側に台地ではつながっているが、谷津を隔てて立地する。約12,500m²の調査が完了している。主な遺構は、弥生時代後期の堅穴住居跡18軒、古墳時代の堅穴住居跡31軒、奈良平安時代の堅穴住居跡59軒、掘立柱建物跡6棟などであった。台地上の地続きであり、遺跡としても殿内遺跡と近接している。

まとめ参考文献

- | | |
|---------|---|
| 殿内遺跡 | 1. 八千代市教育委員会 2007 『千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成18年度』 |
| | 2. 八千代市教育委員会 2009 『千葉県八千代市 殿内遺跡b地点-公共事業関連遺跡発掘調査報告書IV -』 |
| 村上込の内遺跡 | 3. 千葉県都市公社 1975 『八千代市村上遺跡群』 |
| 名主山遺跡 | 4. 八千代市教育委員会 1972 『名主山遺跡』 |
| 西山遺跡 | 5. 八千代市教育委員会 1990 『千葉県八千代市 市内遺跡群発掘調査報告 平成元年度』 |
| | 6. 八千代市教育委員会 2008 『千葉県八千代市 逆水遺跡I, 北裏畠遺跡b, 高津新田遺跡c, 西山遺跡b, c, ほか-不特定遺跡発掘調査報告書V-』 |
| 浅間内遺跡 | 7. 八千代市遺跡調査会 2011 『千葉県八千代市 西山遺跡 墓藏文化財発掘調査報告書』 |
| | 8. 八千代市教育委員会 2000 『千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度』 |
| | 9. 八千代市教育委員会 2002 『千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』 |
| | 10. 八千代市教育委員会 2007 『千葉県八千代市 浅間内遺跡発掘調査報告書』 第2次本調査・第3次本調査 |
| | 11. 八千代市遺跡調査会 2007 『千葉県八千代市 浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡 -八千代市辻田前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書-』 |

写 真 図 版



境作遺跡近景 8号住居跡から北西方面を望む

図版 1



1. 境作遺跡全景



2. 殿内遺跡全景



3.B トレンチ
掘削状況



4.C トレンチ
掘削状況



5.E トレンチ
掘削状況



6.G トレンチ
掘削状況



7.I トレンチ
掘削状況



8.J トレンチ
掘削状況

図版2



1.G トレンチ (08H)



2.F トレンチ (03H)



3.E トレンチ (06H)



4.E トレンチ (06H)



5. 境作遺跡完掘状況



6. 境作遺跡完掘状況



7. 境作遺跡完掘状況



8. 境作遺跡 標準土層